
?デジモンアドベンチャー Crede quia?

雪貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

?デジモンアドベンチャー Crede quia?

【Nコード】

N9256V

【作者名】

雪貴

【あらすじ】

1999年8月1日。

サマーキャンプに来た9人。

『デジタルワールド・デジモン』

わからないことだらけ…。

だがこれが9人の運命の分かれ道となる！

基本的にはオリキャラ2人を加えただけです

第1話 『プロローグ』（前書き）

こんにちはわ！皆さん馴染みの雪貴です

詳しくは活動報告に書いてありますが、新連載しました

こちらの方もよろしくお願いします！

第1話 『プロローグ』

その年の夏は地球全体がおかしかった。

東南アジアでは全く雨が降らず、水田が枯れ…。

中東では大雨による洪水が発生。

アメリカでは記録的な冷夏となった。

（日本）

1999年8月1日。

子供会のサマーキャンプに来ていた9人は何も知らずに…。

それが誰も知らない世界での冒険の始まりだということが…。

????「ん？」

茶髪にゴーグルをかけた少年…八神やがみ 太一たいち。

????「あ。」

少し赤みがかかってヘルメット(?)をかぶった茶髪の少女…武之内空。

「???」つあ。

黄土色の髪をした少年…石田ヤマト

「???」ん?あ。

赤みのある髪をした少年…泉光子郎。

「???」あ。

ピンクのテンガロンハットで長くてうすい茶髪の少女…太刀川ミミ。

「???」ん?

緑色の帽子を被っていてヤマトと同じ髪の色を持つ少年…高石タケル。

「???」お?

淵が茶色の眼鏡をかけていて藍色の髪をもつ少年…城戸丈

「???」あ…。

黒髪の少年…甲斐中輪

「???」お…。

黒髪で腰までの長さがある少女：若瀬わかせ 花音かのん

どうして皆が『お・あ・ん？』など一文字にして言葉を発したかと言うと……。

(フオ~~~~ン！)

雪が降ってきたからだ…。ついには吹雪にまでなってしまったのである。

因みに太一達はキャンプメンバーと別行動をとっている。

先生「お〜い！こっち〜！」

先生が太一達以外のキャンプメンバーを非難させているのである。

これが、太一達9人の新たな冒険の始まりである…。

第1話 『プロローグ』（後書き）

こんにちわ雪貴です

一応こっちの方はリクエストなのでこっちを重点的に更新しますが時間があれば2作品と一緒に更新することができるので楽しみにしててください！

明日は学校なのでもう寝ます。お休みなさいZZZZ

第2話 『漂流！？冒険の島！』 part 1 (前書き)

タイトルは原作と同じですが気にしないで下さい！

今回は主に光子郎と太一です！

それでは第2話スタート！

第2話 『漂流!? 冒険の島!』 part 1

太一「やっと止んだみたいだな。」

太一が外に出ると次はタケルが喜びながら小屋から出てくる。

タケル「わ〜い! 雪だあ! す〜い!」

タケルが元気よく外に出るとヤマトが心配しながら外に出る。

ヤマト「おい、タケル気をつける!」

次に出てくるのは空だった。

空「うう。寒いわねえ。夏とは思えない。」

空が外に出るとまた心配しながら小屋からでてくる丈の姿が見えた。

丈「早く大人の居るところへ戻ろう? いつまでもここにいると――」

丈の言葉をさえぎったのはミミの言葉だ。

ミミ「きゃは〜! キレ〜イ!」

続いて花音も出てくる。

花音「夏なのに雪かあ。」

皆は小屋からだが、唯一出ていない2人はというと……。

(プー・プー・プー)

光子郎「だめかあ。」

輪「何がダメなんですか？」

光子郎「携帯電話の電波ですよ。吹雪が止んだら、電波届くと思っ
たのに……。」

輪「しょうがないですよ。只でさえ今は世界中が可笑しいんですか
ら。」

光子郎「そうですね。もう少し待ちましょう。」

2人が話していると外から太一や皆の声が聞こえてくる。

一同「わあああ……。」(驚)

太一「早く来いよ！光子郎！輪！」

光子郎と輪が外に出るとその空にはオーロラが出ていた。

ミミ「わあ……。キレイ。ロマンチック〜。」

光子郎「こ、これは……。」

空「オーロラよ・・・。」

太一「初めて見たぜ〜!」

タケル「すごいよね〜!?!」

皆はオーロラの存在を受け入れているが、光子郎が否定する。

光子郎「そんな、変ですよ!日本でオーロラなんて!」

空「そうなんだよね。」

丈「は、早く大人たちの居るキャンプ場のところへ戻らなきゃ!」

丈の言葉にヤマトも賛成する。

ヤマト「そうだな。風邪引いちゃつまんねえしな。」

ヤマトが言った後。オーロラの中に小さな穴(?)がでる。それに気づいたのは太一だった。

太一「お、おいあれ!」

太一が言った瞬間。オーロラの中の小さな穴から光の玉が9つ降ってくる。

太一・輪・花音「はッ!?!」

空・光子郎「あッ!?!」

タケル・ミミ「ああ!？」

丈・ヤマト「つあ!？」

9つの光の玉は子供たちの目の前に落ちてくる。そしてその衝撃で雪しづきが掛かる。

花音・ミミ・空「きゃああ!？」

丈・輪・タケル「ああああ!？」

光子郎・太一・ヤマト「うわああ!？」

雪しづきが止んで第一声をあげたのは空だった。

空「皆!?!怪我はない!?!」

ヤマト「何とかなあ...。」

ミミがテンガロンハットを押さえながら...

ミミ「びっくりしたあ...。」

丈「い、一体?」

すると光子郎が光の玉が落ちた穴をのぞく。

光子郎「隕石?...。え!?!」

穴からはポケベルみたいな物が浮かんでくる。
皆はそれを自分の目の前で取る。

花音「何だろう？これ・・・。」

光子郎「ポケベルでも、携帯でもない。」

光子郎が言ったとたん、空にはゲートが開き皆を吸い込む。

男子「うわあああああ？！」

女子「きゃあああつああ？！」

????「太一く？太一く！」

太一は目が覚めて・・・

太一「だ、大丈夫だ…。あ・・・？」

太一は目の前にいる、『物体』と目が合う。
(パチ、パチ)

その『物体』は目を瞬まばたきさせる。

太一は冷や汗をかいて・・・

太一「…ん?…おわあああああ!？」

太一は吃驚して転がっていく。

太一「な、なな、何だこいつ!？」

???「わあい!タイチ気が付いた!良かった良かった!」

太一はアングリをする。そのわけは・・・

太一「喋ってる・・・!?俺の名前知ってる!？」

???「は嬉しそうに太一の周りを飛び跳ねる。」

???「良かった良かった!太一良かった!」

???「はそう言つと太一の両手のひらに飛び移る。」

太一「ああああ!?!何だお前!？」

コロモン「ボク、コロモン!太一、待ってた。」

太一は頭が混乱しているのである。

太一「コロモン…？俺を待ってた。」

コロモン「うん！」

『コロモン』

幼年期 レッサーデジモン

タイプ⇨データ 必殺技⇨アワ

太一「そりゃ一体どういうことだ。大体なんで俺の名前知ってたんだよ！？」

太一はコロモンに問い詰めていく。そして…

????「太一さん！」

太一はその声に反応して吃驚する。そして振り向くとそこにいたのは…

太一「あ、光子郎！」

光子郎「良かった。僕一人になったかと思って…。」

光子郎がそういつと後ろから『物体』がでてくる。

????「何言ってます?ウチが付いているやないですか!」

太一は吃驚してコロモンを手放す。コロモンは転がっていく。

太一「光子郎、あそいつは!?!」

太一が光子郎に問うと『物体』が自己紹介する。

モチモン「ワテ、モチモン言います。よろしゅう。」

『モチモン』

幼年期 レッサーデジモン

タイプ⇨データ 必殺技⇨アワ

光子郎「ここで気が付いてたら、ずっとついて来たんですよ。僕にも何がなんだか…。」

太一は光子郎の言葉に疑問が浮く……。。

太一「此処?ここって…。」

太一「は辺りを見渡す。するとモチモンが、」

モチモン「此処はファイル島ですわ・・・。」

コロモン「そうそう、ファイル島。」

光子郎「彼らはそう言ってますけど・・・。」

太一「うーん・・・。確かめてみなきゃな。」

そう言つて太一は木に登る。

太一「よつと・・・。」

太一はポケットから双眼鏡を取り出して周囲を見渡す。

太一「海だぞ〜？……………あんな山見たことないなあ。」

そして次にコロモンが登ってくる。

コロモン「ねえ〜〜！太一、何してる？」

太一「ああ。。。ん！？何だあれ！？赤い、クワガタムシ！？」

赤いクワガタは太一とコロモンが居る気を巨大なハサミではさみ切る。

太一「うわああ！？」

太一とコロモンは何とか気から落ちはしなかった・・・

モチモン「あ、アカン！あれはクワガーモン！凶悪なデジモンや！」

光子郎「なんだって!？」

コロモン「太一・・・！」

コロモンの声で振り向く太一。

太一「ん？」

『クワガーモン』

成熟期 昆虫型デジモン

タイプ 〓 ウィルス 必殺技 〓 シザーアームズ

クワガーモンが太一目掛けて襲ってきた。そしてコロモンはクワガーモンに攻撃する。

コロモン「ふうう!!！」

コロモンはアワをだしてクワガーモンに攻撃する。コロモンはクワガーモンに衝突され落ちていく。クワガーモンは狙いが外れるが、

太一は木から落ちる。

太一「うわあああ!?!?.....痛たたた。」

光子郎「太一さん!」

太一「俺は大丈夫だ!」

すると上からコロモンが落ちてくる。

光子郎「あ!?!」

太一「コロモン!?!」

太一はコロモンの所に行きコロモンを持ち上げる。

太一「馬鹿野郎!無茶すんな!でも、おかげで助かった。ありがとう。」

コロモン「太一い。」

光子郎「また、クワガーモンが来ます!」

後ろからクワガーモンが追いかけてくる(襲ってくる)。

モチモン「アカン!こっちや!こっちに来るんや!」

光子郎と太一はモチモンに誘導されながらクワガーモンから逃げに行く。クワガーモンは木を切りながら光子郎と太一を追いかけていく。そして.....

モチモン「こっちや〜！」

モチモンは木の中に入っていった。それに驚く2人。

光子郎「え!？」

太一は迷わず光子郎の手を引き木の中へとびこむ。

光子郎「此処は、見せ掛けだけの木なんだ…。」

皆はクワガーモンが来るので伏せている。

そして・・・外からは…。

????「もう大丈夫みたいよ！」

皆が外に出る・・・そこに居たのは…。

第2話 『漂流！？冒険の島！』 part 1（後書き）

次回は part 2！

次に更新されるのは24日もかもしれませんが早く更新できたら更新
します！

次回もお楽しみに！

第3話 『漂流！？冒険の島！』 part 2（前書き）

今回は自己紹介タイムになるかも（？）

第3話 part 2 スタート！

第3話 『漂流!? 冒険の島!』 part 2

太一「空!?!」

なんと皆が外に出たときは空がいたのだ。

空「危なかったね。」

太一「なあに。大したことなかったさ!」

太一がそう言っただけで空の足元に何か『物体』があるのに気づく。

太一「あれ?」

????「クワガモンの音、遠くに行つたよ!空!」

空「うん。ありがとう!ピョコモン!」

『ピョコモン』

幼年期 レッサーデジモン

タイプIIデータ 必殺技IIアワ

太一「ピヨコモンって・・・。」

光子郎「植物みただけど・・・これもあの仲間？」

光子郎がコロモンとモチモンの方を見るとコロモンとモチモンの前に他の『物体』が出てくる。

一同「わあああ」（驚）

光子郎「これも、そうなの？」

????「こつちだよ〜！タケル〜！」

一同「え!？」

タケル「あ、居たいた。トコモン〜！」

『トコモン』

幼年期 レッサーデジモン

タイプIIデータ 必殺技IIアワ

タケルの後ろからヤマトが走ってくる。

ヤマト「タケル！」

太一「ヤマト、お前も!？」

ヤマト「太一!皆いたのか。」

太一「いや、お前の持つてる『それ物体』

ヤマト「え?ああこいつは……」

ツノモン「ボク、ツノモンです……。」

『ツノモン』

幼年期 レッサーデジモン

タイプ⇨データ 必殺技⇨アワ

タケル「トコモロン・ハハハ。」

タケルはトコモロンを撫で撫でしている。
そして突然……

????「ぎゃあああああああああ!?!皆!」

太一「丈!?!」(驚)

丈「助けてくれえ！？へ、変なヤツに追われて・・・！」

????「丈さん！待ってくださいよ・・・」

丈「輪君！」

輪「もう少し落ち着いてください。こいつらの話を聞いてあげましょうよ」。

輪がそう言つと『物体』は少し笑んで怒つて言つ。

????「変なヤツじゃないよ！！ポケモンだよ。」

????「そつだぞ！俺はサンモン！変なヤツは余計だぜ。」

『ポケモン』

幼年期 レッサーデジモン

タイプ＝データ 必殺技＝アワ

『サンモン』

幼年期 レッサーデジモン

タイプ＝データ 必殺技＝アワ

プカモンは丈の肩に乗る。そしてサンモンも……。

丈「どわあああああああ！？……え？」

皆は真顔だった。丈は皆の隣に他の『物体』がいることに気づく。

丈「え？なんだこいつらは！？一体……。」

丈の方に乗っていたプカモンが『物体』のそばに降りる。続いてサンモンも降りる。

コロモン・モチモン・トコモン・ツノモン・ピヨコモン・プカモン・サンモン「僕達、デジタルモンスター！！」

太「デ、デジタルモンスター！？」

そして……

コロモン「ボク、コロモン！」

ツノモン「ツノモン……です！」

ピヨコモン「ピヨコモンだよ！」

モチモン「ワテ、モチモンでんがなあ。」

プカモン「プカモンだよ！……ツパア！」

トコモン「ボク、トコモン！」

サンモン「オレ、サンモンだ！」

太一「俺は八神 太一。お台場小学校の5年生だ！同じ5年生の空。」

空「武之内 空よ。宜しくね。」

太一「やっぱり同じ5年生のヤマト。」

ヤマト「石田 ヤマトだ。」

太一「そっちは丈。」

丈「城戸 丈。6年だ。」

太一「4年の光子郎。」

光子郎「泉 光子郎です。」

太一「え〜と、それからあ……。」

タケル「タケル。高石 タケル。小学校2年生だよ。」

太一「こっちは輪。」

輪「甲斐中 輪。小学2年生だ。」

これで皆の自己紹介が終わった。

太一「これで全員だっけ？」

空「待ってまだ居るはずよ。」

輪「花音が居ない。」

光子郎「それに太刀川 ミミさんが居ません！」

丈「そうだ！4年の太刀川 ミミ君と2年の若瀬 花音君が・・・。

僕はミミ君に・・・」

丈が言いかけようとしたが遠くからかん高い悲鳴が聞こえてくる。

????「きゃあああああああ!?!」

デジタルモンスター
一同「あっ!?!」

その悲鳴が聞こえたとたん一同は走って悲鳴の聞こえたところに向かう。

走っていくと向かいからミミ&花音とデジタルモンスターが2体走ってきた。

ミミ「いやああ・・・。」(泣)

太一「ミミちゃん!?!」

輪「花音！」

一同「あっ!?!」

ミミの後ろからさっきのクワガーモンが追いかけてきていた。

太「クワガーモンだ!?!」

????「ミミ、大丈夫?」

ミミ「タネモン……。」

『タネモン』

幼年期 レッサーデジモン

タイプIIデータ 必殺技IIアワ

花音「落ち着いて下さいミミさん。」

????「花音は大丈夫?」

花音「私は大丈夫よ、ムンモン。」

『ムンモン』

幼年期 レッサーデジモン

タイプIIデータ 必殺技IIアワ

空「大丈夫？ ミミちゃん、花音ちゃん！？」

ミミ「空さん・・・。」

太一「またくるぞ！」

次は方向を変えてクワガーモンが襲ってくる。

空「走つて！」

太一たちは全力疾走する。その後ろにデジモン達も全力疾走する。

ヤマト「伏せるー！！」

丈「何なんだよこれは！？ 此処は一体どう言つところなんだ！？」

ピヨコモン「また来るー！」

トコモン「あ！？」

太一「くそお！ あんな奴にやられてたまるか！？」

空「太一無理よ！」

空の意見にヤマトも賛成をする。

ヤマト「そうだ！俺達には何の武器もないんだぞ！」

そして光子郎も賛成する。

光子郎「そうです！ここは逃げるしか！」

輪「俺もそう思います！」

太一「くっ！」

クワガーモンが来ると皆はまた全力疾走する。

走って行くとみんなは崖まで追い詰められ行く。

太一「こっち（崖の先端）はダメだ！別の道を探すんだ！」

空「別の道って!?!」

空がそう言ったとたん後ろの木からクワガーモンが飛び出して来る。

空「今のうちに！」

太一も走ってくるが間に合わなくなる。

コロモン「太一!!!」

太一「あ!？」

コロモンはクワガーモンにアワをだす。クワガーモンは体制を崩しコロモンに衝突してコロモンを飛ばす。

コロモン「うわあああ!？」

太一「コロモン!？」

クワガーモンは体制が崩れたので太一のところには行かなかった。たが他の皆のところへ行く。

第3話 『漂流！？冒険の島！』 part 2（後書き）

次回で原作の1話が終わり！

中途半端な終わりですけど気にしないで下さい

それでは

第4話 『キャラ設定』（前書き）

今回はキャラ設定です！

輪と花音はどんな人なのか！？

第4話 『キャラ設定』

キャラ設定

（オリキャラ）

『かいなか甲斐中 輪りん』（オリ紋章なので後半から主人公っぽく…）

性格 冷静沈着・少々控えめ

特技 陸上系・特にサッカー・

容姿 イナイレ『いちのせ一之瀬 一哉かずや』を幼児化した姿

トレードマーク 特になし

長所 仲間思い・運動神経抜群

短所 勉強が少し苦手（数学は得意）

備考 輪の両親は花音の両親と出かけに行った際に事故死。そのころ輪と花音は親戚の家にいたため巻き込まれずにすんだ。輪は親が帰って来るのをずっと信じていたが帰ってこなかった。だが輪は1ヶ月くらいですぐに立ち直った。それが輪の取り柄だ。そして輪と花音は親戚の家で暮らしている。

『若瀬 花音』 (オリ紋章なので後半から主人公っぽく…)

性格 冷静・クール (時には無邪気)

特技 頭脳と使うこと

容姿 まどか マギカ 『暁美 ほむら』を幼児化した姿

トレードマーク 赤いリボン

長所 仲間思い・運動神経が良い

短所 自分の気持ちをうまく伝えられない

備考 輪と同じ境遇にあった少女。輪とは幼馴染でそのころも遊んでいた。両親が事故死したと聞いたときはかなり悔やんでいたが彼女はそれがきつと両親と自分の運命だと思ったため輪よりも立ち直りが早かったのだ。花音はどんな嫌なことでもそれが運命さだめと考える。それが花音の取り柄だでも不思議な子だ。

輪のパートナーデジモン。

性格 遊び心がある。戦闘になればしっかり者。

長所 面白さがある

短所 ときどき空気(場)を壊す

『ムンモン』

花音のパートナーデジモン。

性格 結構皆の気持ちができる

短所 サンモンにいつも呆れる

長所 皆のサポート役

これはメッセージボックスに届いたアンケートの結果です！

今日は此処までですが次回をお楽しみ！！

第4話 『キャラ設定』（後書き）

皆さんこんにちわ！雪貴です

文章力には自信がありませんが宜しくお願いします！

花音「感想や駄目だしも待ってるわ。」

第5話 『漂流！？冒険の島！』 part3（前書き）

今回で原作の1話が終わります！
それでは part3 をどうぞ！

第5話 『漂流！？冒険の島！』 part 3

クワガーモンは太一以外の皆の所へ突っ込もうとしている……。
がピヨコモンたちがクワガーモンに攻撃していく。

デジタルモンスター達「うわああ！？」

だがクワガーモンはそのまま突っ込んで行ったためデジタルモンス
ターたちは飛ばされる。

クワガーモンはそのまま空たちの後ろの木にそのまま突っ込んでい
った。

空「ピヨコモン……。」

皆が顔を上げるとデジタルモンスターたちは倒れていた。

太一「馬鹿野郎！なんて無茶を！」

コロモン「だって、僕は太一を守らなくちゃ。」

太一「コロモン……。」

他の皆も駆け寄る。

空「ピヨコモン。」

ミミ「タネモン、大丈夫？」

光子郎「どうしてあんなことを・・・！」

タケル「トコモン、トコモン！」

ヤマト「しっかりしろ！ツノモン！」

丈「プカモン、お前・・・。」

輪「サンモン・・・。」

花音「ムンモン・・・！」

すると突然うしろの木からクワガーモンが飛び出してくる。
さっきよりかなり威嚇している。

太一「あいつ、まだ生きていやがった！」

クワガーモンはどんどん太一たちに近づいてくる。

太一「くそお。このままじゃ・・・！」

クワガーモンは止まることなく少しずつ近づいてくる。すると・・・

コロモン「行かなきゃ。」

太一「え？」

コロモン「僕達が…戦わなきゃ、行けないんだ！」

太一「何言ってるんだよ!？」

モチモン「そうや。ワイらはそのために待つとんたんや!」

光子郎「そんな・・・。」

ピヨコモン「行くわ!」

空「無理よ!あなた達が束になっても敵うはずないわ!」

ツノモン「でも行かなきゃ!」

トコモン「マウ、モウモオ!」

トコモンが喋ってる言葉は読者の皆さんのご想像にお任せします。

プカモン「オイラモオオ!」

ミミ「タネモン…貴方も?」

タネモン「うん!」

サンモン「輪、行かせてくれ!」

輪「でも、負けるなよ?」

サンモン「おう!」

ムンモン「花音、私も行きたい!」

花音「ムンモンがそう言うなら・・・。」

ムンモン「ありがとう!」

コロモン「行くぞ!」

コロモンが太一の腕から飛び出すと他のデジタルモンスターも飛び出していく。

一同「あ!?!」

空「ピヨコモン!」

光子郎「モチモン!」

ヤマト「ツノモン!」

タケル「トコモン!」

丈「プカモン!」

ミミ「タネモン!」

輪「サンモン!」

花音「ムンモン!」

太一「コロモ~~~~~ン!」

すると皆の持っている『特別な機会』が光だし、空には空間が現れそこから七色の光がコロモン達を包み込む。

一同「あ!?!」

コロモン「コロモン進化アアア!アグモン!」

ピヨコモン「ピヨコモン進化アアア!ピヨモン!」

モチモン「モチモン進化アアア!テントモン!」

ツノモン「ツノモン進化アアア!ガブモン!」

トコモン「トコモン進化アアア!パタモン!」

プカモン「プカモン進化アアア!ゴマモン!」

タネモン「タネモン進化アアア!パルモン!」

サンモン「サンモン進化アアア!コロナモン!」

ムンモン「ムンモン進化アアア!ルナモン!」

あまりの出来事に太一たちは驚異する。

太一「なんだ!?!」

アグモン「皆行くぞ!」

アグモン達はクワガーモンに飛び掛るが簡単に跳ね返されてしまう。

一同「あ!?!」

アグモン「これくらい大丈夫!?!」

クワガーモンは飛ばうとする。・・・が、

パルモン「『ポイズンアイビー!?!』」

パルモンがクワガーモンを押さえつける。その上からパタモンが、

パタモン「『エアースョット!?!』」

そして、

テントモン「『プチサンダー!?!』」

ルナモン「『ルナクロー!?!』」

地面に両足をつけようとするが・・・ゴマモンがスライディングして防ぐ。そしてクワガーモンは方膝をつく。

アグモン「皆離れる!?!ベビーフレイム!?!』」

ガブモン「『プチファイヤー!?!』」

ピヨモン「『マジカルファイヤー!?!』」

コロナモン「『コロナツクル!?!』」

クワガーモンはもがき苦しむ。

アグモン「皆もう一度だ!!」

アグモン達はもう一度必殺技を出す。そしてクワガーモンは後ろの木へばったりと倒れていく。

一同「あ……」(驚)

太一「や、やった……!」

するとアグモンたちが太一たちの所へ走ってくる。

アグモン「太一イイ!!」

太一「うわ…す、すげええ!?!ハハハ!お前すごいぞ!?!」

他のデジタルモンスターたちもそれぞれの場所に行く。

コロナモン「やったぜ!輪!」

輪「お疲れ様っ!コロナモン!」

ルナモン「やったよ!花音!」

花音「うん。お疲れ、ルナモン。」

皆が喜んでいると太一の後ろの木からクワガーモンのハサミが見える。

空「!?太一！」

太一「ん？」

太一は間一髪で交わす。が、クワガールモンがハサミで崖の先端部分を落とす。

一同「あっ!?!」

崖の先端部分を落とされたため一同は落ちていく。

一同「うわあああああああ!?!」(泣)

『アゲモン』

成長期 爬虫類型

属性〓ワクチン 必殺技〓ベビーフレイム

『ガブモン』

成長期 爬虫類型

属性〓データ 必殺技〓プチファイヤー

『ピヨモン』

成長期 雛鳥型

属性〓ワクチン 必殺技〓マジカルファイヤー

『テントモン』

成長期 昆虫型

属性〓ワクチン 必殺技〓プチサンダー

『パタモン』

成長期 哺乳類方

属性〓データ(フリー) 必殺技〓エアースョット

『ゴマモン』

成長期 海獣型

属性 〓 ワクチン 必殺技 〓 マーチングフィッシューズ

『パルモン』

成長期 植物型

属性 〓 データ 必殺技 〓 ポイズンアイビー

『コロナモン』

成長期 獣型

属性 〓 ワクチン 必殺技 〓 コロナツクル

『ルナモン』

成長期 哺乳類型

属性||データ 必殺技||ルナクロー

第5話 『漂流！？冒険の島！』 part 3 (後書き)

こんにちわ、雪貴です

これで原作での1話が終わりました！

次回から10話までは2日ずつ更新していきます！

感想、ダメだし、受け付けています！

それではっ

第6話 『爆裂進化！グレイモン！』 part 1（前書き）

今回は原作で2話目！

それでは第6話スタート！

第6話 『爆裂進化！グレイモン！』 part 1

ピヨモン「空！」

テントモン「光子郎！」

パタモン「タケル〜！」

ピヨモン・テントモン・パタモンは空・光子郎・タケルを掴んで飛ぶが重さに耐え切れず落ちてしまう。

丈「うわあああ！？」

ゴマモン「『マーチングフィッシュー！！』」

ゴマモンの技で小さな魚達が増えていき、魚の上に皆を乗せる。

太「た、助かった・・・」（汗）

ヤマト「おい！あれ！」

ヤマトが叫ぶと崖の上からクワガーマンが落ちていくことに気づく。

一同「うわあああ！？」

ゴマモン「急げえええええ！！！」

ゴマモンが叫ぶと魚のスピードは加速する。
クワガーモンが川に落ちた衝撃で巨大な波がたつ。

一同「おわあああ!?!」

皆は必死に魚に掴まり落ちないようにする。
そして……

一同「ふう……」

一同は陸に上がって溜め息をする。

ヤマト「やっと本当に助かったみたいだな。」

丈「何だったんだ? さっきの魚は……。」

するとゴマモンは丈の前に立ち、

ゴマモン「あれはね、マーチングフィッシュさ!」

丈「え?」

ゴマモン「オイラ、魚を自由に操ることができるんだ!」

丈はメガネをかけ直すと、

丈「そうか、あれはお前のおかげだったんだ! ありがとう、プカモン! じゃなくて……えっとその。」 (汗)

ゴマモンは尻尾を振りながら改めて、

ゴマモン「ゴマモンだよ！」

丈「ゴマモン？」

タケル「どうなっちゃったの？トコモンは・・・？」

パタモン「今はパタモンだよ！」

輪「さっきはサンモンで、確かコロナモンだっけ？」

コロナモン「さっそく覚えてくれたのか！？ありがとう輪！」

ルナモン「今はルナモンよ。宜しくね！」

花音「うん。宜しく、ルナモン。」

そしてアグモン達が説明にはいる。

アグモン「僕達、進化したんだ！」

太一「進化？なんだ進化って？」

光子郎「普通はある生物の種、全体がよりコードな種に変化する」とですけど・・・。」

テントモン「そうですね！その進化！ワイはモチモンからテントモンに！」

ピヨモン「私はピヨコモンからピヨモンに……」

ガブモン「俺はツノモンからガブモンに！」

パルモン「あたしはタネモンからパルモンに！」

アグモン「そして僕がコロモンからアグモンになったんだ！」

太一「ふーん。とにかく前より強くなったみたいだな。その、進化してもデジタルモンスターなのか？」

太一がそう質問するとアグモンが嬉しそうに言う。

アグモン「そうだよ！太一に会えて良かったよ！」

太一「え？なんで？」

アグモン「僕は自分だけだと進化できないんだ！きつと太一に会ったおかげで進化できたんだよ！」

太一「ふーん……。」「

空「じゃあピヨモンも？」

ピヨモン「そうー！」

光子郎「皆、そうなのかな？」

テントモン「そうですね！」

パルモンがクルリと回って、

パルモン「ミミのおかげよ！」

ミミ「おかげって言われてもね。」

タケル「もう元に戻らないの？」

パタモン「多分・・・。」

輪「これからもやっていければ大丈夫だよね！」

コロナモン「そうだな！大丈夫×2」

ルナモン「自己中はやめてよね。」（汗）

花音「・・・」（呆）

すると丈が困ったように・・・

丈「なんだかよくわからないな。」

ゴマモン「オイラ達にも良くわからないんだよ。」

丈「うん・・・」

ヤマト「それより、これからどうする？」

すると丈が提案する。

丈「元に戻ろう！大人たちが助けに来るのを待つんだ！」

太一「戻るって言ってもなあ……。」

空「随分流されちゃったし。」

ヤマト「崖の上まで戻るのは簡単じゃないぜ。」

丈「じゃあどうしたら良いんだ？何処か道を探して！」

丈の言葉を遮ってヤマトが喋る。

ヤマト「大体、此処は何処なんだ？どう考えてもキャンプ場の近くじゃないぜ！」

光子郎「そうですね。植物がまるで亜熱帯みたいだ！」

テントモン「ホンマや!？」

光子郎「え!？わかるの!？」

テントモン「いいや。」

光子郎「はあ。」（呆）

丈「下りて来たんだから戻る道もあるはずだ！」

空「そうね。とにかく戻ってみればどうしてここに来たのかわかるはずよ。」

ミニミ「ええ!？さっきみたいのが他にも居るんじゃない!？」

パルモン「居るわよ？」

ミミ「ほらぁ…。」

ヤマト「危険は冒したくないな。」

太一がアグモンに質問する。

太一「他の人間は？」

アグモン「人間？太一みたいなの？」

太一「うん！」

アグモン「見たことないよ。ここはデジモンしかいないんだ。」

太一「デジモンしか居ないって言っても…。」

すると太一は皆を見渡す。

太一「お前ら結構いろんな格好してるよなぁ。」

空「確か、ファイル島って言ってたわよね？」

ヤマト「本当に島なのか？」

光子郎「聞いたことない名前ですよね。」

丈「日本じゃないのか。」

(ボソツ)

そして太一が流すように・・・

太一「とにかく行くこつぜ！こつでじつとしててもしょうがないよ！」

太一の言葉にヤマトが聞く。

ヤマト「おい！どこに行く気だ！」

太一「さつき、海が見えたんだよ！」

ヤマト「海？」

太一「そう！だから、行ってみようぜ！」

太一がそう言うと先頭にでて歩き始める。

輪「行ってみようか。」

花音「うん。」

皆は太一について行くが丈は・・・

丈「こういうときは出来るだけじつとして大人の助けが来るのを待
つんだ！そのためにも本当は元居た所に戻らないと」

丈が独り言を言って居るとゴマモンの声が聞こえてくる。

ゴマモン「丈〜！早く来いよ〜！」

丈「お、お〜い!？」

丈も皆のあとを追う。そして……。

空「見たことのない木ね。」

光子郎「はい。亜熱帯かと思ったけどどうやらそれも違つようです。」

丈「やっぱり日本じゃないのかな?どうも妙だ。」

ヤマト「大体、このデジタルモンスターってことから妙だぜ。」

ガブモン「ふえ?」

光子郎「デジタルモンスター……電子的なモンスター。」

テントモン「普通はデジモンで宜しいって。」

光子郎「デジタルっていう電子的な感じしないなあ。」

光子郎がそう言つとテントモンが、

テントモン「え?電気でつか?ホレ!」

テントモンが電気を発する。

光子郎「あ!?!やめろよ!」

タケル「パタモンってさつき飛んでたよね。」

パタモン「うん、飛べるよ。ホラッ！」

パタモンはそう言って飛ぶ

タケル「わあすごい！」

が・・・

タケル「歩いたほうが早くない？」

するとピヨモンが・・・

ピヨモン「私の方が早いわよ〜！ほら！」

空「どっちも変わらないわよ。」

ミミ「パルモンって植物みたいよね。」

パルモン「そうよ。光合成もできるのよ？」

ミミ「すごいー！やってやって〜！」

パルモン「ミミ、光合成ってなにかわかる？」

ミミ「よく知らないわ？どんなことなの？」

パルモン「いやあ、あたしも良くは知らないんだけど・・・。」

輪「コロナモンとルナモンって何かと何かみたいだよな。」

花音「太陽と月よ。」

コロナモン「俺は太陽の観測データと融合して生まれたデジモンなんだぜ！」

ルナモン「私は月の観測データと融合して生まれたんだよ！」

輪「へえ。」

コロナモン「そういえば花音って輪と違って冷静でクールだよなあ。」

輪「悪かったなクールじゃなくて。」

ルナモン「なんでそんなにクールなの？」

花音「さあ。なんででしょうね？」

それを聞いていた一同の反応は……

一同「……」

太一「そ、そういえば此処にはデジモンしか居ないって言ってたよな？」

アグモン「そっだよ。」

太一「さっきのクワガーマンもデジモンなのか？」

アグモン「そう。」

光子郎「あんなデッカイのが居るなんて・・・他にもいるのかな？」

テントモン「ここにはデジモンしか居てませんて・・・。」

すると突然ガブモンが、

ガブモン「海の匂いがしてきた！」

そして今まで川で移動していたゴマモンが言う。

ゴマモン「見えたよ！海だあ！」

すると突然どこからか、

(チリリリリン)

太一「ん？」

(チリリリリン)

空「こんな所に電話の音？」

皆は走って電話のところへ向かう。・・・そして太一が電話ボックスの戸を開けた瞬間・・・

アグモン「どうした、太一？」

太一「止まった。」

空「こんなところに電話ボックスなんて・・・。」

光子郎「不合理です！」

ヤマト「でも、これはいつも見る電話ボックスだな。普通の。」

ミミ「私の家の近くにあるわ。」

丈「ということは・・・ここはまだ日本なんだ！」

ゴマモン「日本？丈、なんだそれ？」

丈「・・・やっぱり、違うかも。」

すると太一が、

太一「光子郎、十円貸してくれよ！」

光子郎「え？なにするんですか？」

太一「決まってるんだろ！電話かけるんだよ！家に！」

光子郎「ああ。それなら、テレカ（テレフォンカードの略）ありますよ。」

そういつてポケットからテレカをだし太一に渡す。

タケル「ああ！？じゃあ僕もママに！」

「ミミ」「じゃあ私も！」

光子郎「それでは僕も。」

ヤマト「おい！タケル！」

空「私も！」

丈「空君まで！？」

そう言っつて皆入るが・

コロナモン「輪は良いのか？」

輪「どうするかなあ。」

花音「電話、掛けたら？」

輪「うん…じゃあ俺も！」

そう言っつと輪も電話ボックスに入る。

ルナモン「花音は良いの？」

花音「うん。私はいいわ。」

(プルルルル)

太一「もしもし、俺だけど。」

第6話 『爆裂進化！グレイモン！』 part 1（後書き）

さあ太一たちの電話は家に繋がるのか！？

わかんと思いますけど意外な展開になるかも！？

次回もお楽しみに！！

第7話 『爆裂進化！グレイモン！』 part 2（前書き）

part 2！

スタートだぁぁ！！

第7話 『爆裂進化！グレイモン！』 part 2

太一「もしもし、俺だけど。」

電話「もしもし？」

太一「太一だけど。」

電話「もしもし？」

太一「俺だけど。」

電話「どちら様？」

太一「八神太一だけど！」

電話「ああ太一！」

太一「母さん！？」

電話「というのは嘘です！それではお知らせタ〜イム！」

そして・・・

電話「35時81分90秒をお知らせします。ピッピッピッピーー
ー！明日の天気は晴れ時々アイスクリーム。お掛けになった電話
番号は気のせいです！もう一度お掛けになっても無駄です！」

太一「なんだ!？」

ミミ「間違えちゃったのかなあ。」

光子郎「何だ?この電話。」

テントモン「ピヨモン、そっちは?」

ピヨモン「こっちもダメみたい。」

空「。。。。。」

空が受話器を置くと太一がやってくる。

太一「そっちはどうだ?」

空「こっちもダメみたい。」

太一「やっぱり。なんだよ?この電話。。。。。」

そしてしばらく。。。。。

丈「じゃあこれならどうだ!?!」

丈はまだ電話を掛けている。それを見ていた一同は。。。

光子郎「結構、しつこい性格してるんですね。。。」

太一「丈らしいよ。」

ヤマト「何処にかけても聞こえてくるのは、デタラメばかりかあ。」

太一「もう諦めて移動しようぜえ？」

そう言っつて立ち上がる太一。それをヤマトが止める。

ヤマト「ちょっと待て！こっちから掛けられなくても向こうから掛かってくる可能性があるんじゃないか？さっきみたいに。」

ヤマトが意見すると太一はジト目をする。

太一「ここでジツとしても時間の無駄だよ。」

ヤマト「しばらく様子を見てみたらどうなんだと言っつてるんだ！皆疲れてるんだぞ！」

ヤマトがそう言っつと太一は皆を見る。すると光子郎が・

光子郎「お腹も減つてきましたね。」

太一「そうだな。お昼、まだだったもんな。よし、休憩だ、休憩！」

太一が言っつと空が皆に問う。

空「誰か食べ物持つてる？私が持つてきてるのは・・・あ!？」

ソラが触つたのは空から降つてきた『特別な器械』だった。

空「これは・・・あの時空から降つてきた・・・。」

太一「あ、それ！俺も持ったままだ！」

ミミ「あ！？あたしのバックにも付いてる！？」

タケル「僕も持ってるよ？」

輪「俺も持ってます！」

ヤマト「皆持ったままだったんだな。」

光子郎「どうやらこれは何か・・・。」

光子郎がその先を言おうとすると光子郎の腹の虫が鳴る。

(グルルルルウ)

その腹の虫で光子郎は話を変える。

光子郎「ところで誰か食べ物って話でしたよね？」

すると空が・・・

空「私が持ってきたのは旅行用の救急セット。絆創膏と消毒薬と針と糸くらいよ？」

光子郎「僕は、このノートパソコンとデジカメ・携帯電話。でも此処に着てからどれも使えなってるんですよ。どれもバッテリー残ってる筈なのに。」

太一「よく持ってくるよなあこんなの。サマーキャンプに・・・。」

光子郎「太一さんは？」

太一「え？俺！？え〜とこれ！単眼鏡。」

ヤマト「俺も食べ物を持ってないな。」

タケル「僕持つてるよお！ほら！」

タケルがリュックを降ろして開ける。

ミミ「ああ！？お菓子いい！おいそうね。・・・あなたうちの子供会の子じゃなかったわよね？」

タケル「うん！夏休みだからお兄ちゃんどこに遊びに来たんだ！ね？お兄ちゃん。」

ヤマト「ああ。」

それを聞いていた太一は光子郎と話をする。

太一「ヤマトがお兄ちゃんだって。」

(コソコソ)

光子郎「従兄弟いとこですかね？」

(コソコソ)

空「ミミちゃんは何持ってきたの？そのバッグ大きいけど。」

ミミ「あ、これ？これはねえ、
————— (略) 」

一同「あ……。」(驚)

ヤマト「結構本格的なサバイバル用品だなあ。」

一同があんぐりをしてしまう。

太一「普通は持ってこないぞ？こんな物……。」

ヤマト「だが、これからは役に立つかもしれないな。」

空「そうね。これからどうなるかわからないし。」

太一「そっかあそれもそうだな。そういえば花音は何持ってきたんだよ?」

花音「知りたい?」

太一「……あ、ああ。一応な……。」

一同の反応はというと――

一同「(不思議な子だ……。)(汗)

花音「……秘密。」

一同「……。」(驚)

一同「(ある意味すごい……。)(激汗)

花音「でもこれからはきつと役に立つわ。」

太一「そうか、それなら良いんだ・・・。」

アグモン「花音ってよくわからない子だね。」

(コソコソ)

コロナモン「だよなあ・・・。」

(コソコソ)

輪「俺も今いちわかんないんだよ・・・。」

(コソコソ)

そんなことを話していると太一が丈を気にかける。

太一「ところで、丈はまだ電話してるけど食いもんなんか
あ
!?!」

太一が見つけたものとは・・・

太一「非常食だ!?!」

一同「え!?!」

光子郎「本当だ!?!」

すると太一が丈に向かって叫ぶ。

太一「おい丈!?!非常食もってるじゃないかあ!?!」

丈「え！？何で僕がそんなもの持たなきゃいけないんだよ！？」

光子郎「だってそのバッグ！」

丈「バッグ？あ、このバッグはミニ君に届けに行くところだったんだ！？」

ルナモン「ミニだって丈は言ってるわよ？」

ミニ「え？あたし？」

すると丈は鞆を持ってミニのところに行く。

丈「ミニ君！君は非常食当番だったろ！？ダメじゃないか！きちんと管理しなくちゃ！」

ミニ「え〜？だって重たいし・・・。」

丈「そう言っわがまま言ってちゃ——」

花音「ミニさんは今、成長時なの！女の子にガミガミ言う人は、嫌われるわよっ！—」

丈「は、はい。」

一同「（こ、怖えええ！？）」

太一「と、とにかく。昼飯にしようぜ！」

空「そっそっ。。。」

そして・・・

丈「じゃあこの非常食は人間のぶんとして――」

太一「どうだ？うまいか？アグモン？」

アグモン「うん！」

丈「だからそれは人間用！！」

丈がそう言うと太一はジト目で丈を見る。

太一「良いじゃないかケチだなあ。」

丈「ダメ！！」

今まで海でくつろいでいたゴマモンが何かに反応する。

ゴマモン「あ！？」

ゴマモンだけでなく、ピヨモンも何かに反応して立ち上がる。

空「どうしたの？ピヨモン？」

ピヨモン「来るッ！！」

第7話 『爆裂進化！グレイモン！』 part 2（後書き）

〜〜昼飯で略した件について〜

？計算がめんどくさかったから。

？頭使うの苦手だから。

以上！

以後、気をつけます！

第8話 『爆裂進化！グレイモン！』 part 3

ピヨモン「来るッ！！」

ピヨモンがそう言うと砂の中から水が吹き出る。

一同「あ！？」

水はどんどん電話ボックスを破壊していく。

太一「な、何だ！？」

すると砂の中から巨大なデジモンが出てくる。

テントモン「シエルモンや！？」

光子郎「シエルモン！？」

テントモン「此処はあいつの縄張りやったんか！？」

シエルモン「シエルウウウウ！！」

『シエルモン』

成熟期 柔軟型

タイプ＝データ 必殺技＝ハイドロプレッシャー

丈「皆！こつちへ〜〜！」

丈はそう言いながら低い崖を登っていく。

（ブシャアアア！！）

シエルモンはハイドロプレッシャーで丈に攻撃をする。

丈「あ、うわああああ！？」

丈は落ちて、ゴマモンは皆のところに行こうとしたがシエルモンの技を喰らってしまふ。

アグモン「行くぞー皆！！」

デジモン達「おう！！」

太一「頼むぞ、アグモン！」

アグモン「『ベビーフレイム！！』」

シエルモン「うわ、シエルウウ。」

続いて皆も攻撃しようとする・・・

ガブモン「プチファイヤー・・・あれ？」

が・・・

ピヨモン「マジカルファイヤー・・・」

全く技がでないのだ。

テントモン「プチサンダー・・・？」

光子郎「どうしたんだ!？」

ヤマト「どうした、技が全然でてない!？」

するとシェルモンはハイドロプレッシャーでアグモンたちを攻撃する。

ピヨモン「あっ!?!？」

アグモン「うわっ!?!？」

ガブモン「つうわ!?!？」

テントモン「おわぁ!?!？」

パタモン「エアーション・・・ット。」

シェルモンはパタモンを叩き落した。

パタモン「うわ!?!」

パルモン「ポイズンアイビー!?!?!?!?! あれ?」

続いてパルモンも飛ばされる。

パルモン「ぎゃあ!?!」

ルナモン「ティアシユート!?!?!?!?!」

ルナモンも他のデジモンと同じように飛ばされる。

コロナモン「『コロナフレーム!?!?!』」

シエルモン「シエルウウ!」

アグモン「『ベビーフレーム!?!?!』」

太一「良いぞアグモン!?!」

輪「その調子だコロナモン!」

光子郎「なぜアグモンとコロナモンだけが!?!」

するとテントモンが…

テントモン「すんまへん…腹が減って。」

光子郎「え?」

空「そうか！アグモンはさっきご飯食べたから！」

光子郎「でもコロナモンは食べてませんよ？」

テントモン「コロナモンは太陽の観測データと融合したデジモンや。」

光子郎「確かにそう言ってたけど・・・。」

コロナモン「俺は太陽の光を浴びれば飯食わなくても多少はもつんだ！」

光子郎「そっか。」

太一「アグモン！俺達だけでなんとかするぞ！！！」

アグモン「わかった太一！」

太一「ホラッ！こっちだシエルモン！」

そう言っつてシエルモンを誘導する太一。

輪「太一さん！無闇に突っ切ってはダメです！」

コロナモン「アグモン！俺が援護できるのはわずかだ！」

アグモン「わかった！」

空「太一！」

アグモン「『ベビーフレイム!!』」

太一は電話ボックスの骨組みの一部でシエルモンを突く。

太一「このっこのっ!」

するとシエルモンが太一を巻きつける。

太一「う、うわ!?!」

アグモン「太一!?!」

シエルモンがアグモンを飛ばそうとすることにコロナモンは気づく。

コロナモン「危ないアグモン!!」

コロナモンはそう言うとアグモンのかわりに海に飛ばされる。そこで水面に顔をだしたゴマモンと頭がぶつかる。

(ゴツチーン)

2対の目は渦巻き状態になっていた。

シエルモン「シエルウウウウ!!」

アグモン「うわっ!?!」

シエルモンはアグモンを捕まえ、ハイドロプレッシャーで皆に攻撃をする。

一同「うわああ!?!」

太一「くっそ……。このままじゃ皆が……。!?!?何とかならないのか!?!」

シエルモンはもつと太一を締め付ける。

太一「う、うわああああ!?!」

アグモン「太一!?!」

太一「アグモ〜〜ン!?!!」

アグモン「太一イイ!」

すると突然アグモンの体を光が包み込む。

太一「な、何だ!?!」

一同「ああ!?!」

????「アグモン進化アアア!?!グレイモン!?!」

アグモンの進化でシエルモンは体制を崩し太一を手放す。

太一「また進化・グレイモンだって?」

シエルモンが突進してくるがグレイモンが両手で受け止める。

太一「頑張れっ!グレイモン!」

シエルモンは近距離でハイドロプレッシャーで攻撃するがグレイモンは交わし口から大量も炎をだして攻撃する。

シエルモン「シエルウウ！」

グレイモンは角でシエルモンを上には飛ばす。

グレイモン「『メガフレイム!!』」

シエルモン「シエルウウ!!」

シエルモンはグレイモンの攻撃をまともくらい海の彼方へ飛ばされる。そしてグレイモンはアグモンになり太一が駆け寄る。

太一「アグモン！戻ったんだ、大丈夫か？アグモン！」

アグモン「太一ィ。」

太一「ん？」

アグモン「腹減ったあ・・・」

太一「へ？」

そしてゴマモンが海からコロナモンを引きずってあがってくる。未だにコロナ蒙ンの目は渦巻き状態だった。

そして・・・

太一「これで此処にいる意味はなくなったな。」

ヤマト「ああ。」

空はデジモン達にお菓子を揚げていた。

空「さあ、どんどん食べてね！」

光子郎「完全にシエルモンを倒したわけではありません！またいつ襲ってくるかわかりません。早く此処から移動したほうが良いと思います！」

輪「俺も光子郎の意見に賛成です！」

ヤマト「確かにな。」

丈「だったらあの山に戻ろうよ！僕らの最初にやってきた森だよ。あそこで助けを待とう！」

空「前にも言ったけど私たちは崖から落ちて川を下ったのよ！？そう簡単には戻れないわ！」

ミミ「クワガーモンは嫌！」

光子郎「此処に電話があったってことは誰か設置した人間が居るはずですよ！その人間を探したほうが良いかもしれません！」

丈「なるほど。」

空「私もその意見に賛成！」

太一「よし！それで行こう！」

アグモン「僕は太一の行くところだったらどこへでも行くよ！」

太一「ありがとうアグモン！」

ヤマト「じゃそれで決まりだな！」

丈「う、うん。」

花音「丈さんの負けですよ？いつまでも逃げようと考えればダメよ。」

丈「そうだね、行こう！」

ルナモン「花音とってもカッコイイね！不思議って意味もあるけど。」

花音「そうかしら？」

太一「よし、出発だああ！！！」

一同「おっうー！！！」

第8話 『爆裂進化！グレイモン！』 part 3（後書き）

次回は原作で3話！お楽しみに！

第9話 『蒼き狼！ガルルモン！』 part 1（前書き）

原作第2話！の part 1 スタート！

第9話 『蒼き狼！ガルルモン！』 part 1

太一「（どうしてあの時、アグモンだけがグレイモンに進化したんだ？他のデジモンは進化しなかったのに…）」

太一はしばらく考えアグモンを呼ぶ。

太一「アグモン！」

アグモン「何？太一。」

太一「何でお前グレイモンからまたアグモンに戻っちゃったんだよ？」

太一の質問に困るアグモン。

アグモン「それは。」

太一「それは？」

アグモン「僕にも良くわかんないよ。」

太一「あら!？」

アグモンの答えが予想外だったと言わんばかりにこける太一。すると突然、後ろからデジモンが岩を砕いて出てくる。

????「グオオオオオオ！」

光子郎「何だ！？アレは！」

光子郎が言うとテントモンが情報を言う。

テントモン「モノクロモンや。せやけど大人しいデジモンさかい心配しなくてええやろ。」

『モノクロモン』

成熟期 鎧竜方

タイプ⇨データ 必殺技⇨ヴォルケーノストライク

太一「そう言ってるけどこっちに向かってくるぞ!？」

ミニ「やだあぁ!」

太一は後ろの方を見ると、もう1体のモノクロモンが居た。

丈「まずい!?!もう1体居る!?!」

ヤマト「挟み撃ちにされたぞ!?!」

太一「皆逃げろ!?!」

太一がそう言うのと近くにあった大きな岩の陰に隠れる。

モノクロモン「グオオオオオ！」

太一達は岩の陰から2体の様子をみている。

太一「あいつら、仲間同士で戦ってる!？」

光子郎「なぜだ!？」

花音「縄張り争いって考えたらどうかしら?または元から敵同士とか?」

テントモン「花音ハンの言うとおり縄張り争いでしょうな。」

パルモン「今のうちに逃げましょう!」

パルモンのあとを皆が追う。

ミミ「待ってよ!パルモンだけ先に行かないで!」

するとタケルが途中で転んでしまう。

タケル「うわっ!？」

ヤマト「タケル!」

太一「大丈夫だよな?タケル!」

タケル「うん!」

そう言うとタケルは再び走り始める。

そして・・・

辺りはもう夕方になっている。そしてミミは木に寄りかかる。

ミミ「だめえ…疲れたあ。」

太一「もう少し頑張れよミミ。」

ミミ「ダメ。足が太くなっちゃう。」

アグモン「足が太いほうが良いんだよミミ？その方が体を支えるにも土を蹴るにも！」

ミミ「貴方と一緒にしないで！」

するとパルモンが出てくる。

パルモン「そうよ！足って言うのは根っこみたいなのが素適なの！」

ミミ「それも嫌。」

輪「それにしても、奇妙な色の夕焼けですね。」

空「そろそろ日が暮れるみたいね。」

光子郎「そうですね。暗くなって進むと危険です。」

するとテントモンが急に飛び始める。

テントモン「匂います！匂いまっせ！真水のおいや！」

テントモンは木の枝に羽を下ろす。

テントモン「湖！飲み水確保や！あそこでキャンプしまへんか!？」

輪・ルナモン「もう少し落ち着こうよ、テントモン……。」

輪とルナモンはテントモンに聞こえないようにツツコム。

ミミ「あたしテントモンに賛成！もうこれ以上歩けない！」

ヤマト「俺も今日は此処までにしたほうが良いと思う！」

太一「皆疲れて、腹も減ってきたと思うしな！」

タケル「花音ちゃんは大丈夫なの？結構歩いたけど。」

花音「私は平気よ。これくらい歩いたくらいで、疲れはしないわ。」

タケル「そうなんだ……。」（苦笑）

丈「よし、今日はここでキャンプだ！」

そして……

ピヨモン「うわ。大きな湖!？」

空「此処ならキャンプに最適ね！」

ミミが太一に質問をする。

ミミ「ねえ。キャンプってことは野宿ってこと？」

太一「ま、そうなるな！」

ミミ「うそ。」

すると近くにあった路面電車に明かりがついた。

太一「ライトが点いた!？」

タケル「路面電車だ!？」

光子郎「どうして、こんな所に!？」

空「誰か中に居るんじゃないの？」

太一「行ってみようぜ!！」

そう言うと先に太一は電車に行ってしまった。そして皆は電車に行く。

花音「ハズレだったようね。誰も居ないわ。」

輪「それと、床はまだ新しいですね。」

光子郎「確かにそうですね。」

ミミ「ちゃんとクッションも利いてる〜！」

太一「しっかしわかんねえな。この前の海辺の電話といい。」

丈「まさか突然動き出すとか…！」

太一「そんなわけないだろう？線路なんてないんだから！」

空「この中なら眠れそうね！」

テントモン「その前に飯にしまへんか？」

そして……………

ヤマト「夕食の仕度と行くか。」

空「でもどうやって火をおこすの？」

するとアグモンが来る。

アグモン「僕に任せて！」

そう言うとアグモンは火を吹き火を起こす。

太一「お、役に立つじゃんアグモン！」

アグモン「エへへ」

光子郎「いっぱい連れ来ましたよ！」

光子郎とタケルが魚などを持ってくる。

太一「でかしたぞ〜光子郎。」

ヤマト「ありがとな、タケル。」

そして、辺りが暗くなり皆は食事に入る。

ヤマト「タケル、骨とってやるうか？」

ヤマトがそう言うが太一がタケルに言う。

太一「頭からがぶつといつちやえ！」

しばらくすると太一は空の所に行く。

太一「なあ空。タケルはヤマトのこと”お兄ちゃん”って言うてるけどあいつら名字違うよな?。」

空「さあ。私、知らない。」

すると花音がでてくる。

花音「兄弟って思わないの？髪の色も同じ、タケル君は”お兄ちゃん”という。その他色々。道筋はいっぱいあるわ。考えてみれば良い。」

それを言うと花音は電車へ戻っていく。

太一「花音で不思議だよな。」

空「そうね。」

第9話 『蒼き狼！ガルルモン！』 part 1（後書き）

中途半端だと思っけど part 1はこれで終わりです！

次回もお楽しみに！

第10話 『蒼き狼！ガルルモン！』 part 2（前書き）

今回は花音と会話をする人が多いと思います！

それでは part 2 スタート！

第10話 『蒼き狼！ガルルモン！』 part 2

太一「花音で不思議だよな。」

空「そうね。」

太一と空が話していると後ろから丈が溜め息をしながら来る。

丈「はぁ。。。」

空「どうしたんですか？丈先輩？」

丈「方角を確かめようと思って…でも北極星が見つからないんだ。」

空「本当だ。知ってる星座が見当たらないですね。」

太一「おかしいなあ。北極星が見えるのは北半球だけだろ？」

空「じゃあ、此処は南半球ってこと！？」

丈「いや、南十字星も見つからない。」

太一「ってことは一体？」

太一と空と丈がそんな話をしているとパタモンが欠伸をする。

パタモン「ふああ・・・。」

タケル「眠いの？パタモン。」

するとパタモンは寝てしまった。その他のデジモン達も寝る。

太一「ふああ。そろそろ寝ようぜ？」

太一がそんなことを言うと光子郎が意見する。

光子郎「交代で見張りをしたほうが良くないですか？」

輪「そうですね。順番を決めましょう！」

太一「女の子はやらなくて良いだろ？」

太一がそう言うとヤマトが意見する。

ヤマト「タケルもだ！」

タケル「僕、平気だよ？」

ヤマト「いいから。お前はゆっくり休め。」

「ミニ」でも寝るって言ってもお布団とかないのにな。」

すると太一が企みの目でガブモンに言う。

太一「おい、ガブモン。毛布代わりにその毛皮貸してくれよ！俺すつごく気になってたんだよな！」

ガブモンは困り始める。

太一「毛皮の下ってどうなってんの!？」

するとガブモンは逃げる。

ガブモン「それだけは・・・!！」

太一は茶化してしてるがヤマトが太一に言いつける。

ヤマト「よせっ!！」

太一「何すんだよ!？」

ヤマト「嫌がつてるじゃないか!！」

太一「突き飛ばすことないじゃないか!？」

そして2人の喧嘩が始まったがタケルが喧嘩を止めようとする。

タケル「や、やめて2人とも!！」

太一・ヤマト「ふん!！」

丈が話題を変える。

丈「じゃあ最初の見張り番は——」

太一「俺がやる!！」

ヤマト「次は俺だ！」

輪「……」（驚）

丈「じゃあ次に光子郎でその次が輪君。最後は僕だ。よし、じゃあ皆路面電車の中に入って寝るんだ！」

そう言うと皆は路面電車の中に入っていく。

一方の花音とルナモンは……

花音「此处に居たのね。」

ルナモン「うん。」

花音はルナモンの隣に座る。

花音「そう言えばルナモンは月の観測データと融合したデジモンだったわね。」

ルナモン「そうだよ。私は月明かりを浴びるのが好きだから此处に来てたんだ。」

花音「そういうことね。」

しばらくの沈黙でルナモンが花音に質問をする。

ルナモン「ねえ。花音ってさぁ……。」

花音「何？」

ルナモン「ものすごくクールだね？どうして？」

花音「なんででしょうね？」

ルナモン「その答え前にも聞いたよ！違う答えが聞きたい。」

花音「じゃあ、そう言う人間だからって答えるわ。」

ルナモン「ねえ他に理由があると思うの。違うかな？」

花音「・・・その質問に答えることは出来ないわ。」

ルナモン「そっか。でもその答えを聞けるのを待ってるよ。」

花音「まだ先でもいいなら待つて欲しいわ。」

そう言うと花音は立ち上がって路面電車に戻ろうとする。

が・・・背を向けたまま花音はルナモンに言う。

花音「なるべく早く戻ってきなさいよ？」

ルナモン「うん！」

そして花音は路面電車に入っていく。

一方、路面電車の中は・・・

「ミミ」いつもならベットで寝れるのに。」

空「寝るところが見つかっただけでもラッキーだと思おうよ!」

光子郎「それじゃ、お休みなさい。」

丈「お休み!」

タケル「お休みなさい。」

空「(明日までモンスターが出ませんように。)」

ミミ「(お風呂入りたかったなあ。)」

光子郎「(明日も朝から夜まで皆と過ごすなんて疲れそうですね。)」

「

丈「(朝になったら元の場所に戻ってますように。)」

輪「(朝まで、皆が無事で居ますように。)」

皆は思い思いのことを思う。しばらくたってヤマトがガブモンに言う。

ヤマト「ガブモン。」

ガブモン「何?」

ヤマト「お前タケルのそばに行け。」

ガブモン「なんで？」

ヤマト「お前のそばに居ると暑苦しいんだよ。」

ガブモン「へえ。タケルを暖めて欲しいんだ。」

ヤマト「そんなこと言ってねえだろ？」

ガブモン「照れ屋なんだから！」

ヤマト「それはお前だろ？」

しばらくするとガブモンとタケルは眠る。

花音「貴方優しいのね。」

ヤマト「居たのか。」

花音「今、来たばかりだけど。」

ヤマト「でも見てたんだろ？」

花音「そうよ。・・・貴方、私が思った以上に過保護ね。」

ヤマト「しょうがないだろ？弟なんだから。」

花音「やっぱり兄弟だったのね。」

ヤマト「親が離婚したからな。」

花音「そう。守りたいのね、タケル君を。」

ヤマト「当たり前だろ？」

花音「ま、これからも頑張つて？じゃあお休みなさい。」

一方・・・見張り番の太一は・・・

太一「ふあああああ」

太一は焚き火の近くに座つて大きな欠伸をする。

アグモン「眠つたら見張りしてる意味ないよ？」

太一「ああ眠たいなあ。顔でも洗つてくるか。」

そう言うと太一は立ち上がり湖の所へ行く。

太一が顔を洗っていると誰か居ることに気づく。

太一「誰だ!？」

太一が振り返るとそこにはヤマトが立っていた。

太一「なんだ、ヤマトか。交代にはまだ早いだろ？」

ヤマト「眠れなくてさ。さっきは悪かった。」

太一「いやあ。俺も。」

ヤマト「俺はいつもこうだからタケルもお前になつくんだ。」

太一はハツとした顔でヤマトに質問をする。

太一「なあ。タケルとお前って・・・」

ヤマト「兄弟だよ。親が離婚したから別々に暮らしてるんだ。」

太一「そうだったんだ。」

するとヤマトは急に走り出す。

太一「おい!？」

太一はアグモンの所に戻る。

）
）
）

太一とアグモンの耳にハーモニカの音が聴こえる。岸にはヤマトがハーモニカを吹いている姿があった。

ガブモン「良い音色だね。」

一方、太一は・・・

太一は焚きで火を調節している。その時、

（バコンッ!）

太一「焚きが弾けた!？」

弾けた火のついた焚きが大きな葉に落ちる。それと同時に湖の波が
建ち路面電車のある大きな岩の島が揺れる。

ガブモン「!？」

ヤマト「何だ!？」

すると湖の中から竜が現れる。

太「なんだ!？」

空「一体どうしたの!？」

ミミ「地震だわ!？」

丈「やっぱり電車が動き出したんだ!！」

光子郎「モンスターが出たんだ!？」

テントモン「シードラモンや!？」

『シードラモン』

成熟期 水棲型

タイプIIデータ 必殺技IIアイスアロー

輪「皆さん落ち着きましょー！騒いでいてもどろじょろもないですよー！」

ミミ「やっぱり地震だわー！」

シードラモン「グウウウウー！」

岸で様子を見ていたヤマトの反応は・

ヤマト「島が…動いてる!?!」

太一達は・

アグモン「島が動いてる!?!」

光子郎「なんだかこの島をシードラモンが引っ張ってるみたいだ!?!」

テントモン「そんなアホな!?!シードラモンは殺気を感じん限り襲っては来ないんや!」

アグモン「あ、止まった!」

テントモン「あんさんら何かやらかしまへんでしたか!?!」

太一・アグモン「俺たちは何もしてないよ!」

太一は赤くて大きな葉っぱの正体がわかった反応をする。

太一「あの葉っぱは、あいつの尻尾だったのか!?!」

テントモン「やっぱりあんさんらのせいや・・・。」

シードラモンは巨大な尻尾を島に叩きつける。

太一「わあ！？あいつが怒ってる!?!」

一方、路面電車の方は・・・

ルナモン「どうしたんですか？皆さん!?!」

花音「あいつが現れたのよ。」

花音が指をさすとルナモンはその方向を見る。

ルナモン「あれは、シードラモン!?!」

するとコロナモンが起きてくる。

コロナモン「おはよ〜〜。」

ルナモン「おはようじゃないよ!」

輪「お前デジモンだろ？気配くらいわかるだろ・・・。」

コロナモン「俺は特別さっ!」

ルナモン・輪「わけわかんないこと言ってるんじゃないよ!?!?」

コロナモン「冗談だつて・・・。」

花音「こんな時に変な漫才するのが好きなのね。貴方たちは。」

するとシードラモンが島に突撃をする。

丈「うわぁ！？島が流されて行く！？」

第10話 『蒼き狼！ガルルモン！』 part 2（後書き）

次回は part 3！

お楽しみにっ！！

第11話 『蒼き狼！ガルルモン！』 part 3

丈「うわあ！？島が流されて行く！？」

ミミ「あたし船酔いしそう・・・。」

すると岸に居たヤマトが島に向かって泳いでいく。

ヤマト「タケルッ！！」

ガブモンもヤマトの後に続いて跳びこむ。

ガブモン「待ってえ。毛皮が水に濡れてしまう！でもエイッ！！」

島は止まる。

太「やっと止まったあ。」

光子郎「でもこれじゃあ何処にも逃げられませんよ！？」

シードラモン「グオオオオオオ！」

太「襲ってくるぞ！？」

アグモン「皆行くよ！」

デジモン達「OKッ！！」

デジモン達は戦闘体制にはいる。

ピヨモン「マジカルファイヤー!!」

パタモン「エアショット!!」

テントモン「プチサンダー!!」

アグモン「ベビーフレイム!!」

ルナモン「ティアシユート!!」

コロナモン「コロナフレイム!!」

太一「アグモン、進化だ!」

アグモン「僕もさっきからそうしようと思ってんだけどできないんだ。」

太一「なんでだよ!？」

アグモン「なんでって僕にもわからないんだってば!」

太一「肝心なときに役に立たない奴だなあ!」

すると湖の方からヤマトの声が聞こえる。

ヤマト「タケル〜!」

その声に反応するタケル。

タケル「お兄ちゃん!」

タケルはヤマトの所へ向かう。その後ろにゴマモンもついていく。

(「ゴゴゴゴ!」)

島が大きく揺れタケルは湖に落ちる。が、ゴマモンが急いで潜ってタケルを助ける。

丈「いいぞ、ゴマモン!」

太「ヤマト!早く!」

テントモン「ヤマト! シードラモンや!」

ヤマト「ゴマモン、頼むぞ!」

ゴマモン「了解ッ!」

するとヤマトはシードラモンを誘導する。

ヤマト「シードラモン! こっちだ!」

ガブモン「『プチファイヤー!』」

シードラモン「グワアアアアア!」

ガブモンの攻撃でシードラモンが怒り尻尾でガブモンをとばす。

ガブモン「うわあ!」

ヤマト「ガブモン!?!」

ヤマトがガブモンの心配をしているとシードラモンは尻尾でヤマトを巻きつける。

タケル「お兄ちゃん!僕のせいだ僕を助けようとしたから・・・。」

輪「タケルのせいじゃないよ。ヤマトさんだってそう思ってるよ。」

タケル「輪君・・・。」

太一「ヤマトオオオ!?!」

ヤマト「うわあああああ!?!」

テントモン「まずい、まずいデッセ。シードラモンは一度締め付けた相手は息絶えるまで締め付けるんや!」

タケル「お兄ちゃアアアん!?!」

ガブモン「ヤマトオオオ!」

(もうヤマトの吹くハーモニカを聴けないなんてあの優しい音色が聞けないなんて・・・!)

輪「タケル。ガブモンとヤマトさんを信じようよ?」

タケル「でも・・・!」

輪「信じてみることに一つの価値があるんだよ。」

タケル「・・・そうだね。」

ガブモン「ガブモン進化アアア！！ガルルモン！！」

ガルルモンはシードラモンに噛み付くとヤマトが開放され、ヤマトは島に上がる。

ヤマト「はあはあ。」

タケル「お兄ちゃん大丈夫！？」

ヤマト「俺よりガブモンが・・・。」

ヤマトがガルルモンの方を見るとシードラモンの尻尾がガルルモンの毛皮に触れただけで尻尾が切れたのだ。

テントモン「ガルルモンの毛皮は伝説の金属、ミスリルなみの強度なんや！」

光子郎「なんですか？伝説の金属って・・・。」

テントモン「伝説やさかいわても見たことないさかい知りまへん。」

太一「物知りなのかそうでないのかわかんねえ奴だな。テントモンって。」

するとシードラモンが口から冷たいものを吹きガルルモンは凍ってしまっ。

テントモン「あれはシードラモンの必殺技、アイスアローや！」

ガルルモンは氷を砕き技を出す。

ガルルモン「『フォックスファイヤー!!!』」

シードラモン「グワアアアアアアアアアア!？」

シードラモンは湖の中に沈んでいく。

一同「やった!!!」

そして・・・

ヤマト「ガブモン・・・!」

ガブモン「何とか無事だったみたいだね。」

ヤマト「なんだよ。進化できるなら最初からすれよ!」

タケル「ガブモン助けてくれてありがとう!」

ガブモン「い、いやぁ・・・。」(照)

タケル「それにお兄ちゃんもありがとう!」

ヤマト「べ、別に。」(照)

ガブモン「照れ屋なんだから。」

ヤマト「それはお前だろ？」

一同「アハハハハハハッ！」

皆は岸に戻ろうとするが丈が意見する。

丈「でもどうやって岸に戻るんだ？」

ゴマモン「オイラに任せて！『マーチングフィーズ！』」

すると島がどんどん岸に近づいていく。

ミニ「はあ。疲れたあ。」

光子郎「でもどうして今度はガブモンだけが進化したんでしょう？」

空「もしかするとヤマトがピンチだったから！？」

空の言葉で太一は自分の時のことを思い出してみた。

太一「アグモンが進化したときも俺が危機一髪だったときだった。」

するとミニが話題を変える。

ミニ「疲れたあ。もう此処で寝る！」

そう言うと地面に寝転がって寝てしまった。

空「たった一日すごしたただけなのに随分たくましくなったわね。」

アグモン「そのうち僕みたいながつちりとした体になるよ。」

ピヨモン「あたしみたいな翼もね！」

ミミ「それは嫌あ。」

そしてみんなは寝てしまう。

）
）

太一「ふあああ。」

そして太一も寝る。皆が寝るが輪と花音がヤマトのところへ行く。

輪「お疲れ様です。ヤマトさん。」

ヤマト「おう。」

花音「良かったわね。守ることができて。」

そう言つと花音は皆の居るところへ戻る。

輪「ヤマトさん。タケルはまだヤマトさんに頼りかけているから今のうちに教えられることを教えてあげてください。それでは。」

そう言つと輪も皆のところへ戻る。

ヤマト「ありがとな、輪。」

第11話 『蒼き狼！ガルルモン！』 part 3（後書き）

次回はピヨモンがッ!？

次回もお楽しみに！

第12話 『灼熱！バードラモン！』 part 1（前書き）

今回は“多分”何事もない平凡な話だと思います。

それでは、第12話、スタート！

第12話 『灼熱！バードラモン！』 part 1

空「ん？何の音？」

空の言葉で一同が辺りを見渡す。

(シューー！)

するとヤマトが青空を見る。

ヤマト「空に何か飛んでるぞ。」

一同が青空を見る。

丈「歯車みたいなのが飛んでいたね。」

空「空飛ぶ円盤じゃないの？」

丈「何にしても良い感じのものじゃないなあ。」

空が話題を変えて言う。

空「とりあえず先に進みましょう！」

太「でもどっちに進んだら良いかなんて誰にも判んないし。。。」

するとピヨモンが空にくっついて・・・

ピヨモン「あたしは空が居てくれればそれで安心！」

空は困ったように言う。

空「そんなあ。100%安心されても困るんだけどな・・・責任取れないよ。」

空の言葉でピヨモンが聞く。

ピヨモン「あたし空の言ってる言葉がよくわからない。」

空「まだ知らなくても良いのよ!」

ピヨモン「でも空の言ってることいっっぱい知りたい!教えて?ねえねえ!」

空「だからそんなの知らなくても良いよ!」

先に進んでいたヤマトが空に言う。

ヤマト「何じやれてるんだよ?」

続いて太一も・・・

太一「余裕だな」

2人の言葉で空は反発する。

空「好きでジャレてるんじゃないわよ!」

空とピヨモンも皆の後を追う。

テントモン「ピヨモンは人懐っこいデジモンなんや！」

光子郎「なるほど。デジモンによって性格が違うんですね。」

そんなことを話しているとヤマトが何かを見つけたように言う。

ヤマト「森から抜けるぞ！」

そして一同は森からぬけてしばらく歩く。

光子郎「ここってテレビで見たアフリカのサバンナってここに似てる。」

光子郎が汗を拭きながら言う。

太一「え！？じゃあ、ライオンとかキリンとか出てきちゃうのか！？」

輪「そんな普通の動物が出てきますかねえ。。。」（苦笑）

ガブモン「ここにはそんな動物いないよ？」

テントモン「その通り。ここにはデジモンしか居てまへん。」

太一「デジモンしか居ないか。」

花音「ねえ。光子郎さんの見たサバンナって電柱とかあった？」

光子郎「いえ、ありませんでしたね。」

すると丈が大声をだす。

丈「きつと人間が居るんだ！そうに違いない！」

花音「でも海岸の公衆電話や電車みたいなことだってあるんじゃないの？」

丈「いや、違う！絶対絶対、人間が居るんだ！」

するとテントモンは光子郎を呼ぶ。

テントモン「光子郎ハン、光子郎ハン！」

(コソコソ)

光子郎「ん？」

(コソコソ)

テントモン「せやからここにはデジモンしか居てませんで。」
(コソコソ)

そんなことを話しているとミミが方位磁針を持ってくる。

ミミ「ここはいったい何処でしょう？」

ミミは方位磁針を前に出すと針は色んな方向に回る。

ミミ「いやあ。何これ！？」

光子郎は砂を触る。

光子郎「砂みただけでよく見たらこれ、鉄のこなだ！くつつきま
すよー！」

輪「それより、ここ熱いですよ。早く水を確保したほうが良いと思
います！」

皆はその意見に賛成し、しばらく歩く。

太一「それにしてもあついなあ。」

ヤマト「このままじゃ皆、干上がっちゃうなあ。」

ゴマモン「はあ・・・はあ」

丈「熱いのか？ゴマモン。」

ゴマモン「氷が欲しい！せめて水が欲しい！」

皆はだるそうにしているが一体だけルンルン気分の奴が居る。

輪「それにしてもお前は元気だよなあ。」

輪が言った『お前』とはコロナモンのことだ。

コロナモン「だって俺は太陽系のデジモンだし、もっと熱くてもい
いかな。よしじゃ、プチプロミネ——」

ルナモンはコロナモンに攻撃する。

ルナモン「『ティアシユート!』!」

コロナモン「グヘッ!?!」

輪「そんなことやったら干上がりの前に焼け死ぬよ!?!」

ルナモン「あんたは馬鹿!?!確かにコロナモンは普通かもしれないけど皆は熱いんだって!わかる!?!」

コロナモン「す、すみません。」

そしてヤマトが話題を変える。

ヤマト「そ、それにしても歩いてても歩いてても全くなにも見えてこないな。本当に森を歩いたほうが良いかもしれないぞ?」

丈「うんうん」

すると太一がヤマトの横に出てきて単眼鏡を取り出す。「

太一「ちよつと待てよ?」

そう言つて単眼鏡を覗く。

太一「お!村だ!!!」

太一の言葉に一同は反応する。

空「村つ!?!」

丈「ほらほら、村だって。やっぱり人間が居るんだよ！」

光子郎「なにせよ行って見る価値はありそうですね。」

花音「じゃあその村で休むことにしましょうっ？」

タケル「お腹すいたよ。」

パタモン「僕も……。」

花音「この機会に休めるなら休んでおきましょう。」

太一「よし、それじゃあ村に向けて出発!」

第12話 『灼熱！バードラモン！』 part1（後書き）

顔文字で会話をしよう！コーナー！

雪貴「（〃、、（ノ）”　ちわあ
「

花音「こんなことやって何になるの？」

雪貴「ヤレヤレ　（、ー、（　マイッタネ
「

花音「貴方にその顔されるとむかつくわ。いいわ。やってあげる。」

雪貴「v（　（v　イエエイ
「

花音「でもやる条件として……。」

雪貴「（―・・）……ん？

花音「エイッ！（　・（―D　？<……　「（弓矢）

雪貴「　？<　……；・（ノ　メイチュウ！

花音「殺（^・^）（ニコ殺）（^・^）（ニコ殺）（^・^）（ニコ殺）（^・^）（ニコ殺）（^・^）

雪貴「（ニコ殺）（^・^）（ニコ殺）（^・^）

雪貴「。……（p）（q）……ウワン
「！！コメントサイ！！」

第13話 『灼熱！バードラモン！』 part 2 (前書き)

短いかもしれませんが。。

でも13話スタート！

第13話 『灼熱！バードラモン！』 part 2

太一「それじゃあ、村に向けて出発！」

しかし、村に行ってみるとそこに居たのは・・・

一同「あ……………」

太一「『ピヨコモン』の村だったのか!?!」

ピヨモン「ピヨコモン！皆ピヨモンの仲間！」

ピヨコモンA「ねえ。何ていうデジモンなの？」

ピヨコモンAが空に向かって質問をする。

空「え？あたし!?!」

ピヨモン「違うの、違うの！この人たちはデジモンじゃないの！人間っていうの！とっても良い人たち！」

ピヨモンが笑いながら答える。

ピヨコモンA「人間？」

ピヨコモンB「デジモンじゃないの?」

ピヨコモンたちがそんなことを言っていると丈がつぶやく。

丈「あゝあ。人間じゃないのかよ。」

(ボソツ)

太一「何もかも全てピヨコモンサイズだぜ!」

ヤマト「うまくしたらここで1泊くらいできると思ったんだが・・・」

輪「どうやらこれじゃあ無理ですね。」(汗)

光子郎「これじゃあ家の中に入ることも出来ませんね。」

パタモン「僕達だったらなんとか入れるよ!」

丈「人間は無理かあ。」

そんな話をしていると1体のピヨコモンがピヨモンに話しかける。

ピヨコモンC「ねえねえ。ピヨコモンはどうやって進化したの?」

ピヨモン「空と一緒に居たらいつのまにか進化したのよ!」

ピヨモンの言葉に首を傾げるピヨコモン。

ピヨコモンD「』のよ。』って?ピヨモンの言葉?」

ピヨモン「違うのよ!これは空が使っている言葉。一緒に居ると空の言葉、たっくさん覚えるから!」

ピヨコモンE「へえそうなんだ！」

するとピヨコモンCが話題を変える。

ピヨコモンC「それよりどうやって進化したの？ただ人間と一緒にいれば良いの？」

ピヨモン「それはきっと、空を守るため！」

ピヨモンの言葉に疑問を抱く空。

空「(あたしを守る？ただの甘ったれのくせして何言ってるの。)(」

空はそう思っているが今までのことを思い出してみる。

空「(でも、そう言えば……。じゃあ、あたしが危機になったら。

…まさかね！)」

空がそんなことを考えているとピヨモンが話しかけてくる。

ピヨモン「空」。

空「何？」

ピヨモン「ピヨコモンたちがご飯を出してくれるってえ！」

空「ほ、本当！？」

ピヨモンの言葉に一同も喜びをみせる。

ミミ「あたし、お腹ぺこぺこ!」

太一「腹いっぱい食っちゃうぜ!」

ミミと太一が言ってるなか花音がいう。

花音「デジモンの食べるものって人間と違うからどんな食べ物かわからないわよ。」

するとタケルが喜びながら言う。

タケル「水だ水だあ!噴水がある!」

ピョコモンF「この近くには見晴し山の水があるの!」

テントモン「此処があのある有名な見晴し山の水ですわ!」

タケル「見晴し山?」

タケルが質問をするとピョコモンたちは一斉にそっちの方を向く。

タケル「あの山?」

そして皆で噴水を見てみると急に炎が燃え上がった。

一同「おっ!?!」

一同は吃驚していたがただ1体だけ喜んでいた。

コロナモン「おお！？炎だ！よし、この間は海に入っちゃまって濡れたが今回は回復してやるぜ！」

コロナモンはそう言っただけ尻尾を炎につける。が・・・

コロナモン「熱っ！？燃えてる燃えてる！？」

すぐさまルナモンと輪がコロナモンを蹴り飛ばす。

コロナモン「ぐへっ！？」

ルナモン「あんたは馬鹿！？いくら太陽系デジモンだからって炎に尻尾をつけるのは無謀でしょうが！」

輪「尻尾黒焦げにされたいの！？太陽系デジモンの代表が聞いて呆れるよ！？」

コロナモン「ほらあ。俺いつも尻尾燃えてるから大丈夫かなあって。」

ルナモン・輪「場をわきまえろ！！！」

コロナモン「はい・・・。」

花音「あんた達は本当に漫才が好きなのね。ついていけないわ。」

一同「た、確かに・・・。」

一同も花音に同意する。

コロナモン「ってこんな場合じゃねえだろ!!」

輪・花音「あんたがまいた種だろうが!(でしよう!)」

今度は2人がツツコミを入れる。

ピヨコモンG「そんなことよりあっちに井戸があるんだ!」

太一「よ、よし行つて見よう!」

そして、皆で井戸のほうへ行き、井戸の中に木製のバケツを入れる。

(ボウツ!!)

太一「ボウ?」

ヤマト「良いから上げてみよう!」

紐を引つ張りバケツを上げようとしますが引き上げると紐が途中で燃えてちぎれていた。

すると井戸の中からまた炎が燃え上がってきた。

太一「おわっ!?!」

ピヨコモンD「そういえば、さっき見晴し山に何か落ちるの見た!」

ヤマト「それって俺たちが見たあれか!」

花音「黒い歯車・・・」

(ボソツ)

空「でもそれが見晴し山に落ちたからってどうして？」

丈「何が起こってるんだ？」

一同が話しているとピョコモンが言う。

ピョコモンC「あ、でも見晴し山にはメラモンが居るの！」

ピョコモンD「見晴し山はメラモンが守ってると思うんだけど。」

すると太一は単眼鏡を取り出して見晴し山を見る。

太一「見晴し山だなあ。」

太一が単眼鏡を覗くと叫ぶ。

太一「何だ！？あれ！？」

第13話 『灼熱！バードラモン！』 part2（後書き）

今回の話は短いと思った雪貴です

輪「やる気あるの？」

ないよお。。。

輪「作者なんだからしっかりしてよね。」

2度目の人生って大変だよ。

輪「に、2回目！？」

冗談w

輪「というか、次の台詞も準備できてるの？」

・・・次回もお楽しみに！

輪「あ、誤魔化した。」

第14話 『灼熱！バードラモン！』 part3 (前書き)

何事もないと良いですね

それでは、第14話スタート！

第14話 『灼熱！バードラモン！』 part 3

太一「何だ！？あれ！？」

ピヨコモンF「メラモンが山から下りてくる！？」

ピヨコモンG「いつものメラモンじゃない！？」

ピヨコモンたちが取り乱していく。

メラモン「燃えているううう！！！！」

『メラモン』

成熟期 データ

タイプⅡ 火炎型 必殺技Ⅱ バーニングフィスト

メラモン「燃えちゃええええ！！」

太一「あれが、メラモン。」

メラモンが喋りすぎるので一同もメラモンが何を言いたいのかわからない状況である。

メラモン「俺は今、燃えてるぜええ！！」

メラモンが山を駆け下りて山の麓^{ふもと}まで来ると、麓の方は燃え上がる。するとメラモンはとうとう村にまで接近してくる。そして太一は叫ぶ。

太一「皆ああ！！逃げろおお！！！！」

そして皆は近くにある壊れた船にピョコモンたちを避難させる。

太一「皆、早くするんだ！」

空「急いで！」

輪「焦るなよ！」

船の先端部分では花音たちが・・・。

花音「足元には気をつけて。あと焦りすぎると切羽詰ってメラモンの餌食になるわよ。」

丈「なんかヤバイな・・・色んな意味で。」

花音「そうね。」

ミミ「何であんなにボウボウ燃えているのよ！！！」

船の避難用入り口では・・・。

太一「タケル、光子郎。早くするんだ！」

すると空はピヨモンが居ないことに気づく。

坂の上の方を見るとピヨモンがピヨコモンたちを避難させていた。

空「ピヨモン……。」

ピヨモン「皆、こっちに逃げるのよー!!」

ピヨコモンD「ピヨコモンも早くー!!」

ピヨコモンA「ピヨコモンまでやられるよー!!」

けど、ピヨモンの答えは……

ピヨモン「まだ大丈夫!ピヨコモンたち、私たちの仲間じゃない!!」

それを見ていた空は……

空「あの馬鹿、仲間を助けてるんだ……!!」

すると空はピヨモンの方へ走っていく。

太一「どうした!?空!!」

ヤマト「戻って来い!!」

空「だって、ピヨモンが仲間を助けてるのよ!私も行かなきゃ!!」

皆は否定するがただ1人、それを認めるものが出る。それは勿論、

花音「良いじゃない？それが武ノ内 空の答えよ。」

ついにヤマトが怒り出す。

ヤマト「あのなあ！空とピヨモンが安全だって言う保障はあるのか
！？」

太一「おい、ヤマ——」

花音「あるわよ。」

花音はヤマトの質問に即答した。

ヤマト「そんな根拠もなしに・・・！」

花音「根拠なんて1つしかないじゃない？貴方もそう思ってるんでしょ？」

そう言っつて花音は輪の方を向く。

輪「俺も花音に賛成ですよ。ヤマトさん・・・もうちょっと仲間を信じてみたらどうですか？」

タケル「僕も輪君を花音ちゃんに賛成だよ！」

ヤマト「タケル・・・。」

するとヤマトは諦めたような顔をして言う。

ヤマト「はぁ・・・お前らにはつくづく負けるよ。」

ヤマトがそう言うつと空はピヨモンの方へ走っていく。

空がピヨモンの方を向くとピヨモンはピヨコモンたちを避難させ一安心しているようだった。

空「あ!?!」

ピヨモンの後ろにメラモンが居ることに気づく空。ピヨモンはメラモンが居ることに気づいていないようだ。

空「ピヨモン!!後ろおお!!」

ピヨモンは空の言葉で気づく。そしてすぐさま距離をとるがメラモンが大きいため攻撃を喰らってしまう。

ピヨモン「うわぁあ!?!」

ピヨモンはメラモンの攻撃で地面へ落下していく。

空「ピヨモ〜ン!!」

空は落下してくるピヨモンをキャッチする。

ピヨモン「空、ピヨモンのこと助けに来てくれた?」

空「もちろんよ!大事な仲間だからね!」

ピヨモン「ありがとう、空!！」

するとメラモンは手のひらに火の玉を作る。

ピヨモン「空、危ない!！」

空「え?」

ピヨモン「今度はあたしが空を守る!！」

ピヨモンはそう言ってメラモンの所へ行く。

ピヨモン「マジカルファイヤー!！」

だがピヨモンの攻撃はメラモンには全く効いていない。

ピヨモンは攻撃をし続けるが逆にメラモンはピヨモンの技を吸収するばかりであった。

太一「ピヨモンだけじゃ、太刀打ちできない!！」

そう言って他のデジモンたちもピヨモンの援護をする。

ルナモン「どうしたの?コロナモン?」

ルナモンはずっとメラモンを見ているコロナモンを気にかけていた。

ルナモン「ま、まさか……。」

コロナモン「いや、違うし……。」

今回は真剣なコロナモン。

コロナモン「奴は動きと攻撃は俺たちにとって強いかもしれないが
反応が弱いなあって。」

ルナモン「(なるほど!)」

コロナモン「そんなことより、早く援護に行くぞ!」

コロナモンがそんなことを言っているなか、メラモンはもう一度手のひらに火の玉を作りピヨモンに攻撃する。

メラモン「『バーニングフィスト!』!」

ピヨモン「うわあああ!?!」

空「ピヨモン!!!」

すると太一たちが後ろから来る。

太一「皆、ピヨモンの援護をするんだ!」

アグモン「『ベビーフレイム!』!」

テントモン「『プチサンダー!』!」

ガブモン「『プチファイヤー!』!」

パタモン「『エアースhots!』!」

コロナモン「『コロナフレイム!!』」

ルナモン「『ティアシユート!!』」

だがメラモンはアグモンたちの攻撃を吸収し大きくなる。

光子郎「メラモンには効かないんですね!」

輪「どんどん大きくなっていく。」

ミミ「どうなっちゃうの!?!」

丈「もうダメだぁ。。。」

花音「あら、諦めるのはまだ早いわよ。」

大きくなったメラモンは崖(?)の上から飛び降りる。

メラモン「俺は・・・燃えてるぜ!!」

ピヨモン「空が困ってるのに・・・こんな所で負けてられない!!」

すると空のデジヴァイスとピヨモンは光に包まれる。

ピヨモン「『ピヨモン進化アアア!!バードラモン!!』」

空「ピヨモン・・・?」

バードラモンは飛び降りてくるメラモンを掴みとり、投げ飛ばす。

空「ピヨモン。バードラモンに進化した。」

メラモン「おれは、俺は・・・メラメラに燃えてるんだぜ!!」

空「バードラモン！頑張つて!!」

バードラモンは高く飛行し攻撃態勢に入る。

バードラモン「『メテオウイング!!』」

バードラモンは多数の火の玉をメラモンにぶつける。

メラモン「うわあああああああああ!？」

するとメラモンから黒い歯車が飛び出してくる。

ルナモン「あれは・・・黒い歯車？」

輪「あの歯車がメラモンの体の中に入っていたんだ。」

そしてバードラモンはピヨモンに退化して空の元へ飛んでくる。

ピヨモン「空、空~~~~!!!!」

空「ピヨモン！ありがとう!」

ピヨモン「ピヨモン、当然のことしただけだよ!だって空が大好きなんだもん!」

そして・・・

ピヨコモンA「メラモン。目が覚めた？」

メラモン「俺は、どうして・・・。」

ピヨコモンC「良かった。メラモン。」

ピヨコモンB「メラモンどうした？何があった？」

メラモン「空から歯車が落ちてきて・・・。」

ピヨコモンD「そこからメラモンわかんない？」

そんな話をしていると・・・。

(ぐう〜…)

腹の虫が鳴る。

ピヨモン「そういえば、ご飯食べさせてくれえるって約束!」

タケル「僕、お腹ペコペコ。」

第14話 『灼熱！バードラモン！』 part 3（後書き）

こうして皆は美味しくピヨコモンたちにご飯をこちそうになったと
さ

おしまい、おしまい

第15話 『電光!カブテリモン!』 part 1 (前書き)

今回からは子供達視点で小説を創り上げていこうと思います!

それでは第15話スタートッ!

第15話 『電光!カブテリモン!』 part 1

side 第三者

ミミ「もうダメエエエエ。」

タケル「疲れたア。」

ゴマモン「もうー」

パルモン「歩けない。」

一同の反応を見てヤマトが言う。

ヤマト「もう限界か。」

太一も一同の疲れ具合を見て声をかける。

太一「よし、ここで休憩しよう!」

そして一同はその場所で休憩を摂る。

side 光子郎

皆さんが休憩に入ったので僕も木陰で背負っているパソコン入れからパソコンを取り出しパソコンを起動させようと思いました。

光子郎「やつぱり、つかないなあ。」

パソコンを起動させようとしても起動しないので一言小さい声で呟いてみたら、太一さんが急に僕のパソコンを取り上げてきました。

太一「そう言うときは、こう叩けば直るって！」

太一さんが僕のパソコンを叩いて無理矢理直そうとするので僕は慌てて太一さんからパソコンを奪い返しました。

光子郎「ああ！？や、やめてくださいよ！」

太一「俺は、お前のためと思って！」

太一さん。そう言ってくれるのは嬉しいですが人には触られたくない物だつてあるんですよ。

僕がそんなことを思っていると空さんも太一さんに言いました。

空「それはわかるけど、誰だって人には触られたくない物だつてあるのよ！」

空さんも僕と同じ意見でした。

僕は一安心しました。

side 太一

ああ。何か光子郎と空に注意されたなあ。

俺がそんなことを思っていると向こう（12時の方向）から煙がたつていた。

太一「何だ！？あれは！？」

俺は呟いてそっちの方に走って行くと、アグモンもついて来た。

アグモン「待ってよ！太一！」

side 光子郎

僕はまたパソコンをいじっているとパソコン画面に反応があり、様子を見てみると、画面が起動しました！

光子郎「やった！パソコンが起動したぞ！」

起動したのは嬉しいのですが画面の下の方を見るとバッテリーが0になっていました。

光子郎「でもバッテリーが0なのはどうして？」

そんなことを思っていると太一さんが叫んで皆さんを呼んでいました。

side花音

休憩の時間でも騒がしいわよね。いつも思っているんだけど。

その原因は、八神太一 よね。さっきは光子郎さんのパソコンを叩いて注意されたらどこかへ行くし、その後は叫んでみんなを呼んでいるし。

花音「先が思いやられるわね。」

(ボソツ)

私が咳いたら隣に居たルナモンが眠たそうに私に言ってきた。

ルナモン「今、花音何か言わなかった？」

長い話は嫌いなので早く会話を切り上げるために短い返事をする。

花音「何も言っていないわよ。空耳じゃないかしら？」

ルナモン「そっか。」

ルナモンは私の言葉に納得して再び寝てしまった。別に構わないけど。

すると八神太一がもう一度叫んでみんなを呼んでいた。

side 第三者

太一が皆を呼んで集める。

一同が見たものは……

輪「工場……？」

そして一同が工場の中に入る。

が、工場の中では『変』な物を作っている。

タケル「ねえ何作ってるの？」

ヤマト「さあ。調べてみないと判らないな。」

ヤマトがそう言うと丈は大声をあげて言う。

丈「調べるならここに人間がいるかを調べるんだ！こんな大きい工場だから人間一人くらい居るはずだ！」

それを聞いていた子供たちは呆れ、デジモンたちは啞然していた。

一同は何人かにわかれて調べたり人間を探したりする。

side 太一

俺は空と丈と一緒に人間を探している。

太一「誰か居ないのかああ？」

空「誰か居ませんかああ？」

丈「居たら返事してください！」

俺たちは叫んで人間を探している。

そして少し歩いて空が呟く。

空「本当に居ないのかしら？」

丈「そんなことはない！絶対にこの広い工場の中に人間がいるはずだ！」

丈はまだそんなことを言っているし・・・いい加減現実を見て欲しいよ（呆）

俺がそんなことを思っているとピヨモンが何かに気がつく。

ピヨモン「あれ？」

空「どうしたの？」

ピヨモン「何か聞こえる！」

ピヨモンは耳がいいな・・・耳がいいと言えば、ルナモンはどんな小さな音でも聞き取れたり感じ振ることが出来るって言ってたっけな・・・。

そんなことを思っていると皆は耳を済ませていたから俺も耳を済ませた。すると唸り声みたいなのが聞こえてきた。

太一「人間の声か！？」

side花音

私は光子郎さんと輪と一緒に行動をしているわ。

しばらく歩いていくと、どうやら光子郎さんが動力室を見つけたよ
うで。

光子郎「動力室だ！」

輪「入ってみますか。」

輪が扉を開けるとそこは本当に動力室だったわ。

光子郎「『オバケ電池』と『モーター』だ！」

輪「こ、こんなので動かしていたんだ。」（苦笑）

花音「さすがデジタルワールドっていった所かしら？」

side アグモン

僕達は人間という者を探しながら走っていたら、途中の通路に何か
を発見したんだ！

アグモン「ん？あれ！！！」

僕は太一たちを呼び戻した。

空「何かしら、あれ？」

僕達は『あれ』を近くで見ると、『あれ』に近づいてしばらく見ていたんだけど丈が隣でガツカリしてたよ。

太一「ロボット？」

太一がロボットと勘違いをしていたからゴマモンが太一に言う。

ゴマモン「ロボットじゃない！アンドロモンだよ！」

第15話 『電光!カブテリモン!』 part1 (後書き)

眠たいなあ。。。

次回もお楽しみに!

輪「え!?!これだけ!?!」

第16話 『電光!カプテリモン!』 part 2

side 第三者

ゴマモン「ロボットじゃない!アンドロモン!」

太一「これもデジモンなのか?」

ピヨモン「そう!しかもすごく進化したデジモン!」

太一「進化って、グレイモンとどっちが強いんだ?」

ゴマモン「絶対、アンドロモンだね!」

アグモン「それに良いデジモン!」

太一が聞くとアグモンとピヨモンとゴマモンが元気に答える。

空「助けてあげましょう?」

空が意見すると皆は頷き、機会(歯車)で埋まっているアンドロモンを引っ張る。

一同「よいしょ!」x2

太一「おわっ!」

(ガシャン!)

太一「手がすべり体が後ろ行ってしまい、後ろにあるレバーを押してしまっ。」

アンドロモンを埋めている機会は動き出し、一同はアンドロモンを機会の山から引っ張り出す。

丈「動かないぞ・・・？」

太一「こっぴつ時は――」

一同「あ、ダメー！」

一同はアンドロモンを叩こうとする太一を抑えたが・・・

(バシッ！！)

一同「あ・・・」

一同は目を点にする。その訳は・・・。

丈「ダメじゃないか！ロボットは叩くものじゃない！！」

そう、アグモンがアンドロモンを叩いたのだ。

空「そうよ。叩いたから余計に壊れたのかも・・・」

空達がそんなことを言っていると、アンドロモンがいきなり空の足を掴み立ち上がる。

空「きゃああ！？」

一同「え!?!」

空「え? ちょっと、なにこれ!?!」

アンドロモン「シンニユウシャハッケン。シンニユウシャハッケン。」

『アンドロモン』

完全体 サイボーグ型デジモン

タイプIIデータ 必殺技IIガトリングミサイル

太一「何するんだ!」

ピヨモン「『マジカルファイヤー!?!』」

ピヨモンの攻撃でアンドロモンは振り向くと同時に空を投げ飛ばす。

空「きゃああ!?!」

太一・アグモン「おおっ!?!」

投げ飛ばされた空を太一とアグモンがキャッチする。

丈「あいつは良いデジモンじゃなかったのか!？」

ゴマモン「その筈なんだけど・・・!?!」

アンドロモンはどんどん太一達に近づいていく。

太一「・・・くっ!」

????「『コロナフレイム!』!」

????「『ティアシユート!』!」

アンドロモンは攻撃のされたほうを向く。そこにいたのは・

????「大丈夫ですか、太一さん!」

太一「輪!?!」

????「こんな所に居たのね。」

空「花音ちゃん!?!」

アグモン「コロナモン!」

ゴマモン「ルナモン!」

ルナモン「結構探したよ!」

コロナモン「これは“貸し”ってことだ!」

ピヨモン「……………」

コロナモン「ジ、ジョークだよ！」

輪「いい加減冗談はやめろ。」

丈「今のうちに逃げようー!!」

一同はアンドロモンから逃げる。

side 光子郎

僕はこのオバケ電池に興味があるのでずっと辺りを調べていました。そしたらドアがありました。

光子郎「あ、こんな所にドアがある。」

僕はドアを開け何か入りました。

そこは見たことのない字が壁にいっぱい書いてありました。

テントモン「これ、なんでっか？」

なんだろう？でもプログラムに見えるなあ。

光子郎「コンピューターのプログラムかも・・・。」

僕はそう言ってプログラムを触りました。

触ったところは消えてしまい、電気が消えてしまいました。

テントモン「ありゃ。工場中の電気が消えてまっせ。」

プログラムを消したからかなあ？

光子郎「コンピューターのプログラムを間違っつて消したせいかな？」

テントモン「どうでっしやる？」

うん。どっやってつけよう。

テントモン「ああ、せや。消したところを直せば、わかるんちゃいまっか？」

あ、そっか。なるほど・・・。

光子郎「それもそうだ！」

僕はマジックペンを取り出して、消したところを書き直しました。

そしたら工場中の電気が復活しました。

私たちは今、アンドロモンから逃げているわ。言い争いをしながらね。

太一「あのなあ！今、立て込んでるんだからそう言う話は後にしてくれよ！」

輪「その前に、今は喧嘩をしないでくださいよ！」

そんな話をするくらいなら足に集中して欲しいわ。

アンドロモン「シンニユウシャハツケン。『スパイラルソード！』」

太一「！？」

花音「伏せなさい！！」

皆はすぐさま伏せてくれたわ。

でも、まだこれからよ。

第16話 『電光!カブテリモン!』 part2 (後書き)

更新が久しぶりですなあ。

花音「話の最後は私で終わらせないでくれる?」

どうして?」

花音「私には合っていないからよ。」

うん。考えておく。

第17話 『電光!カブテリモン!』 part3 (前書き)

今回は光子郎が大活躍!!

17話の part3 スタート!!

第17話 『電光!カプテリモン!』 part 3

side 花音

花音「早く皆に知らせるわよ!」

丈「この街は危険だ!」

私たちは再び走り始めて皆所へ急いだわ。

side 光子郎

僕はさっき発見したプログラムのことについてヤマトさんとタケルくん・ミミさんに話そうと思いきやヤマトさんのところへ行きました。

光子郎「ヤマトさん。この工場ではプログラムそのものがエネルギーを作っているんです!」

ヤマト「えつと・・・?」

光子郎「つまり、この世界ではデータとかプログラムとか、本来なら口のデータでしかないものが実体化して——」

太一「お〜〜〜い!!」

僕が話していたら太一さんが大声で話を中断させました。なんかいつもよりとても焦っています。

ヤマト「どうした？何か見つかったか？」

太一「逃げる！アンドロモンが！」

ヤマト「アンドロモン？」

太一さんたちが走って僕達のところへ来ようとしていましたが、急に地面からロボットみたいなデジモンが現れました。

アンドロモン「シンニユウシャハツケン。『ガトリングミサイル！』」

するとアンドロモンは攻撃をしてきたので僕たちは端へ逃げましたが、タケルくんが逃げ遅れてしまいました！

ヤマト「タケル!!」

ガブモン「俺に任せて!!」

その途端ガブモンは光に包まれました。

ガブモン「【ガブモン進化アアア!!・・・ガルルモン!!】」

ガルルモンが進化をしてタケルくんを守りました。そしてアグモンも光に包まれました。

アグモン「【アグモン進化アアア！！・・・グレイモン！！】」

ガルルモンとグレイモンがアンドロモンと戦っています。

しかし、アンドロモンはガルルモンとグレイモンを相手にしても負けませんでした。

ヤマト「確かに進化しているな。」

空「パワー・スピード。どれをとっても私たちのデジモンより上だわ！！」

確かに空さんの言うとおりです。

どうやったら勝つことが出来るのでしょうか？

テントモン「光子郎ハン！さっきのプログラムを使ってみたらどうでしょう？」

光子郎「そうだね。やってみるか！」

僕はパソコンを開き、さっきのプログラムを分析しました。

分析し終わると、テントモンは光に包まれました。

テントモン「【テントモン進化アアア！・・・カプテリモン！！】」

一同「やったあああ！」

テントモンが、カプテリモンに・・・。

カプテリモンはすぐにグレイモンとガルルモンの援護に向かいました。

アンドロモン「【ガトリングミサイル！！】」

丈「アンドロモンに弱点はないのか！」

弱点・・・。

僕はアンドロモンの弱点を見つけるためにアンドロモンを見ていました。

するとアンドロモンの右足が壊れかかっているのを見つけました。

光子郎「カプテリモン！右足だ！アンドロモンの右足を狙え！！」

僕はすぐさまカプテリモンに伝えました。

カプテリモン「【メガブラスター！！】」

カプテリモンの攻撃はアンドロモンの右足に直撃し、右足からはあの黒い歯車がでてきました。

しかしそれは、すぐに碎けてしまいました。

アンドロモン「機械に紛れ込んだ黒い歯車を取り出そうとしましたがあんなことに。」

また黒い歯車ですか・・・。

アンドロモン「本当に君たちには申し訳ないことをした。」

輪「気にしないでくださいよ!」

花音「そうだ・・・この街から出る方法は?」

いつも思っているのですが、花音さんって単刀直入ですよね。

アンドロモン「この街から出るには、この地下水道を通ると良い。」

僕達はアンドロモンにお礼を言い、地下水道に入っていました。

第17話 『電光!カブテリモン!』 part 3 (後書き)

今回のsideは光子郎しかなかったです!!

まあ良いか!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9256v/>

?デジモンアドベンチャー Crede quia?

2011年10月11日22時51分発行